

KULIC

10

1977. 10

慶應義塾大学研究・教育情報センター

KULIC 10

目 次

- 1……………新所長の抱負 利用者の立場で 有賀 一郎

特集 続・私の研究とライブラリー

- 3……………専門雑誌との出会い 鷲見 成正
7……………アイデアとインフォメーション 安西 修一郎

- 12……………重要文化財に指定された相良家文書<トピックス> 高橋 正彦

- 13……………新図書館・研究室棟(三田)建設調査委員会の答申<トピックス>

現状分析レポート

- 14……………理工学情報センターの一つの役割 小川 治之
20……………日吉情報センター藤山記念図書館利用の一断面
—学部学生館外貸出記録の調査— 関 洋

- 23……………明石屋六兵衛版『鎌倉絵図』 白石 克

- 27……………学術情報流通体制の整備と
三田情報センターにおける資料組織上の問題 柳屋 良博

- 32……………図書館とコンピュータ 安西 郁夫

- 2/18……………SCIENTIFIC ELITE<ティールーム> 松浦 保

- 6……………図書館・情報学科図書室に移って<スタッフ・ルーム> 田中 美美子

- 11/18 ……Padova 雑感<ティールーム> 有働 勤吉

- 19……………視聴覚メディアと図書館の接点<スタッフ・ルーム> 渡部 満彦

- 26……………図書館,そして本の選択<ティールーム> 岩野 節夫

- 33……………年次統計要覧<昭和51年度>

- 36……………編集後記 <表紙> 孫福 弘 <カット> 高山真理

利用者の立場で

理工学情報センター

有賀一郎

(工学部教授/機械工学)



この度、はからずも理工学情報センター所長に就任した。この際、門外漢の私がこれまで利用者として抱

いていた注文をもう一度思

い起こし、一体どのように情報センターの実際の運営と結びつけることができるか改めて考えてみたいと思う。

現代のように情報化された時代でも最も手近かに接触できる情報源は書物であり雑誌であり、その公共的管理・公開の場が図書館、資料室である。必要な情報を図書館で手にした時の安堵感と期待に反した時の苛立たしさを利用者の皆さんは経験されていることと思う。これは当然ながら豊富な蔵書とその的確・詳細な所在の明示の必要性を意味しており、図書館の基本的機能の一つとみることができよう。反面、図書購入と収納空間に対する十分な経済的裏づけ、資料整理の最適化をはかる設備、有能な人材の養成等を考えると基本的機能ながら無制限に図書、人員数を拡充するのは不可能である。こうなると当然、他の図書館の情報収集状況が容易に利用者に提示されることが望ましくなる。現在図書館の重要な機能として窓口サービス等で行われていることは、まだ十分とは思われない。

図書館は、従来、人と図書とのみの接触の場と考え、利用者は周囲との隔絶に細心の注意を払うのが常であった。しかし利用者同志が不特定な資料の中から討論を重ね、その価値づけをする必要性が増えており、こういった人から人への情報交換のできる場を図書館に求めるのも一つの利用法になろう。

図書館は利用者にとり快適でなくてはならないが、単に設備が良いばかりでなく利用者、職員がお互の立場を

十分理解し、思い遣りをもつことである。それには利用者が自己中心に走らず図書の慎重な扱い、情報整理への協力、快適な環境保全などいわゆる利用者としてのエチケットを守るよう配慮すると同時に、利用者の情報収集に対し職員の親身なレファレンスサービスと環境整備に対する積極性を失わないことが必要であろう。

以上のような問題点を理工学情報センターにいかんにか反映するかは甚だ難しいが、素人なりの私見を述べさせていただくと以下になる。あらゆる考えを含むすべての資料をもつという建前からすると、図書館にとり図書の充実、整備をはかることが何にも増して大事であるが、現実的には周囲の条件との均衡を無視する訳にはいかない。このような場合に重点主義を採らざるをえないのではないかと思う。幸い研究用資料は比較的貴重な文献が関係者のこれ迄の努力で備えられつつある。一方、前所長のご指摘にもあるように学生用図書の整備が極めて遅れている様に見受けられ、工学の発展進度に合致せず教育的に甚だ不具合に思われる。利用者の意見を反映した購入、整備方法を考えつつ充実をはかるのが急務であろう。他方、工学が非常に多角化し、学際領域の進展を思う時図書対象をさらに広げ、従来不足している面を合せ補充する必要があるであろう。一方、周辺地区における同様機関との連繫を深め、有無相補う姿勢で利用者への便宜をはかることも必要である。この際、情報センターの公共性からいって関連分野の部外者にも積極的に門戸を開放することにより周辺との連繫がはじめて具体化していくものとする。現存の自習室などの有効利用法の検討も含め、内部の整備をはかりつつ、周辺に常に気を配る努力を忘れないことが望ましい。さらに省力化、高能率化などのためのハード、ソフト面における改善に意欲を燃すと共に図書館の基本的機能、使命の充足度に対し常に点検を怠ってはならないと思う。

情報センターの技術的運営面に全く素人な私が敢えてなしうことは利用者の立場を実感としてその途の専門家に伝え、共に解決に努力し折角充実しつつある理工学情報センターの歩みを後退させないことであろう。隔意のないご助言を賜わり、ご指導頂ければ幸いである。

注) 筆者は任期途中で高等学校長に転出した堀内敏夫君の後を承けて昭和52年7月1日から理工学情報センター所長に就任した。任期は前任者の残任期間で53年3月31日まで。

SCIENTIFIC ELITE

松浦 保

三田の図書館は、わが国における経済学史研究者にとっての宝庫である。最近、塾の財政難から図書購入が思うにまかせず、そのためこの名声がいつまでつづくか、ちょっと心配だ。ともかくいまのところは、他大学からも文献の問いあわせが多い。

わたくし自身の経験からいっても、ライフワークとなったイタリア経済学史研究への誘因は、この図書館でうまれたといつてよい。

シュンペーターは、その著『経済分析の歴史』において、イタリア経済学が二つの時期に、すなわちアダム・スミス直前と1900年前後において世界最高の水準にあったことを指摘している。1900年前後とは、イタリアにおけるローザンヌ学派の経済学者パレートたちが活躍した時期である。一般均衡理論に興味をもっていたためか、わたくしにはなぜわが国の研究者がイタリアの研究をこれまでおこなわなかったのかということが気がかりであった。ちょうど大学に残ったころ、三田の図書館でクストディ編『イタリア経済学古典全集』50巻をみつけた。おそらく当時わが国にこの全集は一セットか二セットぐらいしかなかっただろう。これはスミス直前のイタリア経済学を知る貴重な文献であった。直接的には、この全集を図書館でみつけたことが奇妙なイタリアという国にさまよいこむ契機となったのである。

わたくしが経済学史研究に関心をもちはじめたころ、近代経済学の研究者のあいだには学史研究を無視する風潮が支配的であった。この分野のほとんどすべてがマルクスの使徒であった。マルクスは、経済理論を社会体制

のイデオロギイ的表現とみて、自己の理論展開において学史研究が不可欠であると考えていたから、このことは当然である。

しかしマルクス経済学者たちは、経済学の生成過程を経済的要因にかぎって分析するが、もっと広い視点からこの問題をとりあつかえないものかといったことがわたくしには問題であった。たとえばマンハイムとかデュルケームのような立場で社会構造と社会理論の関係をとらえることもできる。最近では、R・マートンが知識社会学の研究成果として『社会理論と社会構造』という著作をあらわしているが、このような分析視点を経済学史

研究にとりいれることができるのではなからうか。

このごろでは経済学史研究は、知識社会学の一領域にすぎないのではないかなどと思うこともある。そんな気持ちで経済学史研究にこだわらずに本をあさっていると面白い本にぶつかる。最近、米国のノーベル賞受賞者を知識社会学の立場から

分析した。《SCIENTIFIC ELITE》という書物に接した。

この本は、ノーベル賞受賞者たちがどのような社会環境に育ち、どのような教育をうけどのような機関で研究をおこない、またどのような径路で受賞できたかを詳細に調べあげている。そして受賞後の学界への影響力なども評価している。

エリートという言葉は、C・W・ミルズの『パワー・エリート』といった著作もあるように、このごろよく使われる。しかしなんといつてもパレートの「エリート交替論」が有名である。ある時代に大衆をひきつけて、支配的な地位を確立したエリートも、やがては大衆をひきつける魅力を失い、新しいエリートにとってかわられると、この理論は説く。

<以下18ページへ続く>

専門雑誌との出会い

鷺見 成正

(経済学部教授/心理学)



大学2年の後期から3年間の長期休学が、理科から文科へと私の専攻を転向させる動機となった。それまでさほど興味をもたなかった心理学に籍をおくことになった当初は、当然のことながら専門書を開けて見る気もおこらず、暮の好きな友人と研究室の片隅で、あるいは狭い下宿先で時間をつぶした。3学年に編入したので、半年を過ぎたころから卒論準備のための実験にとりかからなければならなくなった。新制国立大学の創設期にあたり、その研究室の貧弱さは誰れしもが認めるところである。その中で比較的金めの物で小型の生体現象観測器が1台おかれていた。増幅器とペン書きオシロを組み合わせたもので、説明書には脳波、GSR. とならべて筋電図の測定が可能とあり、それが私の興味をそそった。早速表面電極法で腕の筋肉の動きを調べてみると、力の入れ加減でペン先の振幅にかなりの変化が見うけられたのである。生理学の書物を開けてみると、たしかに筋電図は筋力に比例してその値を増加させてはいるが、そのデータの単位が kg ときわめて大きなものであることを知った。一方、教室での講義を通じて多くの錯視現象の存在を教えられ、その中に重さの錯覚が含まれていることに気付いたのである。誰れしもが経験する“綿一貫目と鉄一貫目とはどちらが重いか”を筋電図で測ってみたいことができないだろうかという素朴な疑問をもった。しかしこの種の錯覚の微妙な感じ方の違いを測定しようとするには、記録される値の単位があまりにも大きすぎる。それからしばらく生理学教室に通い銀鉈

を電極針に使っての測定法を学んだ。しかしパルス波測定となると設備面での欠陥が目立ちはじめ、無駄な実験の繰り返しが多かった。その間、この“大きさ-重さ”の錯覚をこれまでの人がどのように取扱ってきたかを調べてみる必要を感じ、専門本をしばしば開けてみるようになった。そこで気がついたことは、本の中の記述のすべてとっていいほど、専門雑誌に掲載されている論文を参照していることである。芋づる式探索からいくつかの論文を見出すことができたが、はじめて手にする雑誌のどれもがドイツ語で書かれているのに困った。貧弱な語学力を駆使して文面からなんとか理解の糸口を求めようと懸命であったが、そのような中で“Pflügers Archiv für die Gesamte Physiologie des Menschen und der Tiere”, “Zeitschrift für Psychologie”, “Zeitschrift für Psychologie und Physiologie der Sinnesorgane” といったいずれをみても歴史の古さを感じさせる雑誌の存在を知るようになったのである。まるでくもりガラスに映った幻影のどこか一部でもいいから輪郭線を浮き上がらせたいという気持で努力したが、長い論文の中によく出てくる Einstellung とか Vorstellungsbilde といった単語がどうも肝心な言葉らしいということが分ただけで結局終わってしまった。

雑誌 Psychologische Forschung との出会いは授業を通じてである。主任の盛永四郎先生の講義は、国際心理学会へ日本を代表して出席された前後でかなりの違いを生じた。以前の講義は知覚的事実を中心にした細い分析であって、新入生にとってあまり面白いものではなかった。しかし帰

国後の講義の中には、その言葉の端ばしに新しい思考の枠組みが強烈ににじみでてきた。静かな口調ではあるが内容は既成の理論に対する厳しい批判に終始した。いまにして思えば、数年後に訪れるすべての生命活動停止の日を予想しての講義であったのかもしれない。Psychologische Forschung に掲載されている論文の引用はしばしば講義の中でなされたが、実際に論文そのものに接したのは演習であった。コピー技術のない当時、タイプができる学生が原書を借りて論文全部を写し、謄写印刷にかけてテキストを作った。古ぼけた木造家屋の中の小さな演習室に専攻生みんなが集り、裸電球の下、だるまストーブを傍に置いて先生の授業が進められた。ざら紙に印刷された論文の一行ずつを丹念に読み進んで行く先生の言葉 1 つ 1 つには、論文のすべてに通曉する者の自信が満ちあふれていた。“私はこの論文を 6、7 回繰り返して読んですべてを理解したつもりだったが、ドイツに行ったときにお前はそれだけの回数しか読んでいないのかと逆に質問された。”とか“論文の内容についてどんなことでもいい、疑問質問があったら分るまで何回でも来なさい。”といった言葉をなつかしく思い出す。それについてもいまだに自信をもってこれだけのことを云い切れる論文の一編すら持ち合わせていない自分がなさけない。ゲシタルト心理学のエッセンスを示したこの論文と先生の面影とが固く結びついて、Psychologische Forschung の雑誌名は私にとって終生忘れられないものとなった。後になってこの雑誌に自分の論文の掲載が許可されたときには本当にうれしかった。先生はその学年末の授業の数を Metzger 著“Psychologie”の一節を抜き出してきてその解説にあてた。国際心理学会東京開催の折来日した Metzger 教授は、“今の若い人が書く文章は私が書いたものに比べるとずっと難しい”と語っていたが、なかなかどうしてその本の内容は暗号文の解説にも似て難解であった。しかし教授と親しい盛永先生にはさほど難しさを感じなかったのであろう。学生に与える解説はき

わめて分り易いものであった。“Leib-Seele-Problem”, “Bezugssystem”, そして “Einstellung”, 三題ばなしにも似て、この 3 つの言葉が授業を通じて私の頭の中で結びついたときに心理学に対する興味がわいてきた。必然的に卒論研究も筋力の生理学的測定から重さの知覚的特性の分析へと移っていったのである。

大学院学生として慶應三田の研究室に入ったときには、まず雑誌の種類が多いのを目を見張った。それまでは、見たいと思う雑誌はまず研究室にないものと決めてかかっていたのに、実物がちゃんとそこに並んでいるので驚いた。図書館地下に入って古い号の雑誌を手にしたときには、大学の旧さをしみじみと感じ、直接書棚から自分の手で文献を抜き出すことができるしあわせを味わった。それまではドイツ中心の雑誌をみてきたが、こんどはアメリカ中心の雑誌、American J. Psychology, J. Experimental Psychology, Psychological Review, Psychological Bulletin といった雑誌に目を通す機会が多くなり、修士課程の 2 年間は、これら以外にも沢山の専門雑誌があることを教えられ、それらをどのように読むかを習った時代といえる。卒論実験は小川隆先生から助言をいただいて運動視の装置と取り組むことになった。物理的には直線軌道上を移動しているはずの光点が、暗室内では全く違った軌道をえがいて動いて見えるのが面白く、毎日旧第一研究室 3 階に通って飽きもせずに光点の動きを眺めつづけた。強い西日があたるとどうしても光が漏れてしまうので此処あそことふさぐのに苦労したことや、時々窓を開け東京タワーの高さが少しずつ伸びていくのを眺めたりしたことが思い出されてなつかしい。

昔、農村の夜祭りで車輪の縁にたいまつを取りつけて走って行く車を見たガリレオが、たいまつが火が回転ではなくてサイクロイド状をえがいていくのを知り驚いたという記録がある。運動する物の軌道の見え方については古くから報告が残されていても、それを組織的に観察した例はあまり

多くない。小川先生の研究発表を契機にして短期間集中的に多数の論文が日本で発表されているのは大変めずらしいことである。このため、日本の学会誌“心理学研究”のそのころの号をよく見るようになった。小川先生のすすめで実験結果をまとめてこの心理学研究に掲載したのと、アメリカの *Perceptual and Motor Skills* 誌が文献調査を進めていたのがちょうど一致し、同誌に要約を送ることになった。このことがきっかけとなって2編ほど短い論文を掲載することになったが、その際何度も封書の宛名に Univ. of Montana, Missoula, Montana とタイプしたことから、以来この雑誌を見るたびに住所を思い出すのである。

当時運動視研究のまとまった本としては、Sweden, Uppsala 大学の Johansson 博士による“Configurations in event perception”が知られていた。現象記述に行きづまっていた私にとってこの本から受けた影響はきわめて大きい。林銓蔵先生と博士とは15年に近い親しい間柄で、日頃からいろいろと聞かされていたせいもあってか日吉の心理学研究室に博士が来訪された折、すこしも初対面という感じをもたなかった。Uppsala 大学から毎年送られてくる Uppsala Report それに雑誌 *The Scandinavian J. Psychology* は博士のあたたかい人柄をしのばせてくれる。現在、研究室から不定期に刊行されている Hiyoshi Report は、Uppsala Report に相当するものを研究室からぜひ出す必要があることを痛感された林先生の尽力によるもので、この方はわれわれの努力で今後発展させていかなければならない雑誌である。

Johansson は、動きの知覚はすべて網膜面上に投影される網膜像の変位にその基礎がおかれていて、視覚系はその変位情報をうけとめベクトル分析をほどこして視覚的世界を静止背景、運動枠、ものの動きの3者による構成へと変換してしまうと考える。たしかに移動する列車の中で人が手を振っているとき、地上に立っている人にはその手が上下に動くように見えても波状の軌跡をえがくようには見えない。しかしながら、網膜面上で像

の変位が起こらなくても運動印象が発生するとすると、網膜面のみに記述のよりどころを求めるとはいかなくなってくる。頭部と眼をまったく固定してしまった観察者が前方におかれた静止視標を見ているとき、左、あるいは右に視線を意図的にずらそうとすると視標はそちらに動いて見えるといわれている、そうすると求心性の変位情報を2種類に分けて、1つは実際に外界で発生する物理的变化にもとづいて起こってくるもの、他の1つは観察者の意図的随意的運動に伴って起こってくるものとしなければならなくなってくる。視覚系は後者の変位情報を何処かで相殺してしまい、純粹に外界からの変位情報のみを受け入れる仕組みを作り上げているにちがいない。もし何らかの原因でこの相殺が不完全なものになると、その残りの成分が中樞に伝達され結果として運動印象を生じることになる。この考えが運動視研究にとって1つの新しいアプローチであることを示唆した von Holst の論文が *Studium Generale* に掲載されているところから、この雑誌の名前を身近に感じるようになってきた。Zeitschrift für interdisziplinäre Studien と副題がついているこの雑誌はきわめてヨーロッパ的色彩の濃いもので、語学力の無い私にはその内容を充分理解することはできないけれども常に身近に置いてはらはらページをめくり眺めていたい感じを抱かせる。この雑誌を見ていると、von Holst のような考え方は決して突然に現われたものではなくて、ヨーロッパの古い伝統的土壌に深く根ざした哲学的思想をその背景にしていることが少しずつ分ってくるような気がする。残念なことに1971年24巻でこの雑誌は打ち切られてしまった。

研究にたずさわる人誰れしもがそうであろうと思うのだが、自分にとって専門雑誌との出会いその1つ1つが自分研究の流れの中のある時点と深く結びついていて、それぞれに思い出がこめられている。これから先どのような方向にその流れが進んでいくかによって、また新しい専門誌との出会いが始まることになるであろう。

図書館・情報学科図書室に移って

田中 美美子

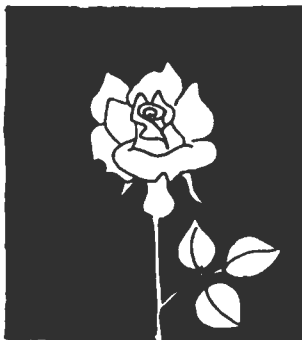
11年間を過ぎた四谷・医学情報センターから、なつかしい青春時代をすごした三田に、本年6月移り流れてまいりました。最初は三田は、企業でいえば、本社だなと緊張し、しかしやがて、冷房のないこと、氷の配給のあることでここも“三田村”であることを確認し、さらに、地理的にも、人口密度上も、事務系4人、教員数人という意味で、又、情報研、電気室とも離れており、西校舎、とくに図書館・情報学科は見事にも“僻地”でありました。

図書室を見ますと、あまりの難題の多さに最初は啞然とし、次に失望のどん底に陥入り、最後に怒り狂い、教授スタッフと情報センター本部にあたり散らしました。ごめんなさい。

3カ月たった今、文字通り、汗とほりまみれで、ニッコリしているゆとりはいまだに全然ありませんが、情報センター本部、情報センターの収書、雑誌室、参考係、複写係ほかあらゆるセクションの方々の協力を得て、やっこさっこやっております。

その結果、徐々に、具体的に前進して来ましたので、少々御報告いたします。

洋書の選書方法は、前任者の努力で教員3名との図書委員会の協力によって決定しました。その結果、1977年1月からの主要誌誌11誌の書評の教員の分担制によるチェック、調整が行われ、現在情報センターを通じて発注を開始しました。収集・受入・整理業務としては、図書の注文、支払い、登録など、又、目録カードに関しては、従来のLC印刷カードから4月以降は、LC、MARC打出しカードの利用を実施しはじめ、情報センターの同様の業務システムの一環にのせるべく、現在、各担当者と打合せの上、調整実施中です。



資料管理上の問題としては、①良いコレクションを揃える。つまり重要な雑誌、図書の整備。又、逆に資料価値の低下した資料に関して、他センターへの移管その他の処置について検討する必要があります。②書架スペースが100%ふさがってしまったので、やむをえず製本雑誌1964までを、大学院共同研究室523へ移すことになり、全面的な構成替えにより、9月には、一段と使いやすい書架を提供出来る予定です。③現在、継続中の雑誌の内、索引・書誌類は専用の雑誌架を用意しました。④三田情報センターとの間ではすでに行っていますが、各々のセンターで所蔵又は受入検討中の図書館・情報学関係の雑誌および図書の調整・協力を計ってゆければ少い予算を互いに有効に生かせるのではないのでしょうか。

学外との協力活動としては、東大、国会図書館、図書館短大の各資料室によって、洋雑誌の所蔵を記録した“図書館学関係洋雑誌総合目録”を作成する事が計画され、9月末日までにデータ提出が予定されています。

8月25日から3日間富士吉田で開かれた専門図書館協議会、

関東地区協議会の第13回ビジネス・ドキュメンテーション研究集会に参加しました。各企業の資料室、研究室の責任者の迫力に満ちた発表に、全員強烈な刺激と感銘を受けました。

図書館・情報学科は、僻地の小さな存在ですが、それでも当然のことながら“大学図書館”の一部であり、かつ、特定の主題を持ち、主として特定の人々をサービス対象としているという意味では“専門図書館”“研究図書館”でもあり、さらに何よりも図書館学の教育用の図書館でもあるという多面性のある性格を持っています。限られた条件の中で、この多面性をどの様に実現してゆくかは難しいことだと思いますが、優秀なスタッフと利用者を含む大勢の方々の協力で、心豊かに仕事の出来る日々を創り出してゆきたいと願っております。
(図書館・情報学科 係主任)

アイデアとインフォメーション



安西 修一郎

(工学部応用化学科助教授)
(物性制御工学)

エメラルド色の日吉台、その上を泳ぐ白い夏雲、それらを縁どる樺の緑陰が目に涼しく、読書や筆記に疲れた頭を休ませてくれる。ゆったりとした空間やセンター員と利用者の競張ばらない仕種も爽やかである。私はここ(矢上台の理工学情報センター2階)で調べ物をしたり、思索に耽ることが大好きである。今日ここに座っているのは、編集委員のOさんから依頼された“自分の研究と文献との出会い”について書くためである。書棚を一巡してみると、研究の小ピリオドごとに重要だった1冊1冊の本が目につく。でも、ゲーテの研究者なら必ず座右の書とするであろうゲーテの原典のような物が私の場合には思い浮かばない。とは言っても、一つの世界思想体系を著わしたモノグラフや個々の情報源としての雑誌は、実験とか他人との discussion とならんで私の研究のアイデアの源泉である。そこで、自分の研究テーマの誕生、実行そして発表という過程でインフォメーションとしての文献とどのようなお付き合いがあるかを2・3の提言も交えて書くことにしたい。

私の専攻分野を自分の担当している講義の名で言うとなれば物性制御工学とでもなるだろうか。¹⁾ ひらたく言えばこんなことである。磁石は1個1個の原子磁石(スピン)から成り立っていて、それらのお互いが電子的媒介による団結力によってある種の秩序的な配列(強磁性あるいはフェリ磁性配列という)をしている。力の性質は違うが2つの棒磁石を各々中心から糸で吊るすと、[S-N][S-N]と揃おうとするのに似て

いる。これを指で弾くと配列は滅茶苦茶になる。これに対応するものが結晶中の原子の熱振動を通しての擾乱力である。その兼ねあいで、ある温度(キュリー点やネール点)以下でしか磁石とはならない。原子磁石の起源は電子的なものだから、これが絡まって低温では非金属だったものが、転移点以上では金属のような電氣的挙動を示すことすらある。このような状態(相)の変化を各々磁気転移あるいは電子相転移と呼ぶ。成分の一部を他の元素で置き換えたり、あるいは圧力や熱膨脹による原子間距離変化によって電子間あるいは原子間の力を変えれば、この転移現象は変化する。このような変化を実験により測定し、他の方法によるデータをも良く説明出来る機構を研究するのが第1の目標である。勿論、この知識を利用して転移点を制御し、室温以下でしか磁石にならない材料を利用出来るようにするという実際的な目的もある。こんな訳で、対象とする文献も物理学、化学、材料科学……とかなり広範囲にわたっているし、手掛けてきた研究の方法も色々である。そこで、それらをカバーするように4つの実例を用いてお話ししよう。

(ケース1) この分野に足を踏み入れたのは原子力研究所固体物理研究室へ国内留学した大学院生の時である。この時分にはまだ自分で考え出せなかったのが、K先生やH先生からテーマをいただいた。それは、MnTe という磁性体にネール点の上下で原子炉から出てくる遅い中性子をあて、得られた反射像の違いから原子磁石 Mn の配列を解析しようというものであった。私は Schiff の量子力学や Bacon の中性子回折の本を紐解く一

方、Chemical Abstracts (C. A.) でその物質についてこれまでに報告されているすべて (//) の情報を洗い出してみた。20数件出てきた文献のうち、この研究に必要な2・3点(試料合成法、原子磁石の磁場に対する温度挙動)を集中的に勉強した。この物質はネール点の少し上(130°C)で結晶構造を変化させる可能性があることがその1点に指摘されていた。これでは転移点の上下の反射像を単純に比較出来ない。そこで、この変態の正体を探るために試料の温度を上げながら種々の温度での結晶構造をX線を用いて調べてみた。問題の130°Cを越える頃には記録計の赤いペンがぐーっと振れ動き MnTe には無いはずの回折線を描くではないか。いろいろと実験条件を変えて調べ、この変態は酸化雰囲気の下でのみ現われることを確かめた。早速、この結果をその文献の掲載されていた雑誌にショート・ノートとして投稿した。文献になかった世界の景色を眺め、それを文献に自分達の手で加えることの出来た喜びをひしひしと味わったのは図書館の新着雑誌の中にその報文²⁾を発見した時である。やっと本筋の中性子を用いる仕事に辿り着いてから数ヶ月たった頃のことである、引き続き MnTe の情報をサーベイしていた私はA国の雑誌に中性子回折による研究が発表されたことを知った。知りたいことが文献を見さえすればわかるという喜びとともに、「先を越されたか」という感じを持ったことは否めない。自分の学問的興味や疑問は自分の頭や手で(時には足で!)探究したいという欲望が働くからであろうか。取り寄せた文献上にはこれまでのモデルでは説明不能の反射像が存在すると報告されていた。文献上の図をよく見るとどうも精度の上からその反射像は有意とは言えないようであるし、私共の回折図形には全く現われないではないか。研究は続行と決まり、MnTe 中の Mn 原子磁石は一層おきに反対方向を向き、全体としては磁石の作用をしていないことを明らかにすることが出来た。前述の参考文献にまず注目し、それを充分検討したため、偽の変態が起こらぬような実験条

件を設定出来たことが私共に幸いしたように思われる。これと同時にB国のグループが同じ研究を進めていたが、私共の論文³⁾が先に雑誌に受理されてしまいそちらは日の目を見なかったとは後で聞いた話である。仕事が研究としてのstatusを持つ条件は originality であって、priority を失ったら没になるのはどこの分野でも同じである。時間の節約という意味からも、沢山の情報の中から必要充分なもののみを選び出すということは大切なことである。

(ケース2) 1つの研究の締め括りとして論文を書いている時に出てきた疑問から次の研究テーマが出てきたり、研究の過程で知り得た知識から新しいアイデアが醸し出されることが多い。例のMnTeの原子磁石のうちの一方向きのものを原子磁石でないMgで置き換えれば強磁性体にならないだろうかとは私は考えた。そこで、工学部へ奉職するようになってから、院生のT君とこのテーマに取り掛かった、その原料MgTeの調製を試みたところ、試料のX線反射像の中に既知の物質MgTe以外のものが観測された。関連物質のX線反射像の1本1本の位置と強さまで覚え込んでしまったほどの徹底したT君の文献調査に裏付けられて、私達は研究の方針を転換し、この偶然発見した事象の解明に取り組んだ。この未知の反射像はMgTe₂というMnTe₂と同形の新物質の存在を示していたのである⁴⁾

(ケース3) 私は週に一回ぐらい図書館1階へ行き新着雑誌を「パラパラ」と捲る(たとえば、J. Phys. Soc. Japan, Phys. Rev. B, J. Phys. C, J. Phys. Chem. Solids, Phys. Stat. Sol., Solid State Commun., J. Appl. Phys., Jap. J. Appl. Phys., Inorg. Chem. など) ことにしている。系統的でないので何となく頼りないようであるが、どうしてどうして大切なアイデア源である。3個の金属元素(M)と、4個の(X)(S, Se や Te) から構成されているM₃X₄型の物質にはNiAs型と呼ばれるものとスピネル型という構造が知られていて、その構造変種が物性を支配している実例が

よく、「パラパラ」の時に目についた。折から講義中の量子化学の中に2重結合に対する Hückel 近似というのが出てきた。そこでは、結合の強さが原子が電子を引きよせたがる力（電気陰性度）によって表現されていた。各々の構造変種の安定性がこのモデルと関係あると睨んだ院生O君と私は図書館から借りた教科書 Daudel の量子化学に引用されている文献、さらにそれに引用されている文献を辿って行って Hückel 近似の適応範囲などを勉強した。そこで、手近の2次文献にリストされている数十の M_3X_4 化合物を中心に電気陰性度とのいろいろな相関性を調べてみたが、どれもこれも駄目であった。2つの結晶模型を目の前にして何日も討論した末に、NiAs 型構造ではMとMの原子間距離が近いからその結合の強さを金属の蒸発熱で近似してみようということになった。驚いたことに、これら2つのパラメーターを縦横の軸とした図上では2つの構造の安定化領域は綺麗に分離するではないか！ ここまできたので、C. A. を用いた M_3X_4 物質総点検を実施した。昼間収集した物質のデータが見事にそのパターンに適合して行くのを見て秋の夜長を忘れたものである。C. A. は物質を主体にしてサーベイする時は偉力を発揮する。また Physics Abstracts (P. A.) は事項を American Institute of Physics などが決定した Subject Classification に沿って掲載していて現象面から調べる時に有効である。ところが湧いてきたアイデア（特にテーマ）が既出のものか新しいものかを調べるのは両者を使ってもかなり困難である。アイデアがオリジナルか否かを判定する時には普段の知識の積み重ねに頼らざるをえない。万一の調査漏れを恐れていただけに投稿⁶⁾した雑誌の編集者から「掲載に十分な originality を持っている」というレフェリーコメントがきた時には嬉しかった。

(ケース4) 「パラパラ」の時にみつけたり、自分で考えついた転移に関するアイデアをノートに書き留めておき、十分に発酵したらテーマに取り入れる。その際は、特に新しい方法を開発する

必要のない限りその試料の合成法や分析法はなるべく過去の情報を利用し時間を節約している。その1つとして、 Cr_5S_8 (磁気転移) や NiS (電子相転移) の Cr や Ni を他の元素で置き換え、その磁氣的、熱的、電気的な研究⁶⁾を院生卒論生の諸君と行なっている。転移現象そのものの勉強のために私は P. A. の70.00台(凝集物質の電子構造と電気的、磁氣的、光学的性質)の71.30(金属-非金属転移)や75.00(磁氣的性質と磁性体)をサーベイしている。つい先頃、電子相転移の幾つかの機構について一連の文献を編集したので、これらの院生諸氏とのゼミナールに使ったり、講義の材料にしたいと思っている。こういった学問としての昇華作業がテーマやモデルの発生する土壌となるものであって、私の場合には現物の「パラパラ」や「精読」がこれに役立っている。こんな訳で、図書館がマイクロフィルム化したら私は当惑してしまうだろう。もう1つはこれらの物質に高圧力をかける研究であって、これは原研物理部のO先生と共同研究させていただいている。最近、NiSの圧縮率を測定し、転移点の圧力効果の実験結果のシュミレーションを同先生と行なった。⁷⁾ この場合には up to date な物性値にも目を通す必要があったので、矢上台よりかなり早く雑誌が到着する東海村からのO先生の情報が大変貴重な働きをした。矢上台でも、せめて新着雑誌のうち閲覧頻度の多い上位20件ぐらいは目次のページのみをまとめたコンテンツサービスを作り、1部で良いからインフォメーションデスクに常備することが望ましい。

国内で入手不能な文献は、I should greatly appreciate receiving a reprint of your paper: (題名) which appeared in (雑誌名等). という手紙を出して著者から送ってもらっている。必要なら「and any related papers available.」と付け加えておくと印刷中の報文の preprints をもらえることがある。著者の priority が発生(受理日)してから図書館に来るまでに6ヶ月ぐらい必要であるから、この種の情報には大助かりであ

る。ある時、現住所が不明な著者の1943年のソ連の文献が必要になった。科学アカデミーの雑誌の部署に問い合わせたところ、引退後の本人に連絡してくれた。直送されてきた reprint の余白に「I am very glad to send you this old reprint of the war-time. ... At present I am far from this topic. ... I wish you much happiness and good health.」と私信があり、激烈な独ソ戦の最中に Mott と Jones の教科書をひろげたり計算をしている人物の姿が髭髯として浮んでくるようである。その延長上に自分達がいるわけで、研究の個々の情報が持つ時間と空間を超越した連続性を感じさせられる1コマである。年を経るにしたがい、矢上台に対しても現職でない研究者に対する外部からの問い合わせが多くなると予想される。たとえば、数年前に院生のK君を筆頭者にして共著論文を書いたことがある。reprint 請求者からの宛名に彼の名しか無かったためか、手紙は矢上台、三田、彼の就職先そして矢上台へと一周してしまった。所属教員・事務職員個人別のファイルを情報センターに用意し、ここにそれぞれの人の書いた論文、著書、評論、エッセイ、テキスト等の reprints を集積していったらどうだろうか？ 新設科目の担当者を探す時や、他の方にものを教わりに行く時にも大変便利である。そればかりかそのようなアウトプットインフォメーションによって大学のアカデミックな特色を外部

に公開することは“開かれた大学像”という社会の要請にも応えることになるであろう。

情報を完璧に、早くかつ要領良く提供するというライブラリーの発展志向の結果として、将来は地球上のどこかに大きな中央情報センターが設置され、ここにすべての文献や特許が記録されるであろう。利用者は最寄りの支部から要求事項を細分化した項目のコードになおし端末機によって人工衛星を通してそこへ送る。数分後には必要充分な情報のみがテレタイプによって手元に届くのも夢ではあるまい。しかし、どんなに情報のシステム化とコミュニケーションの方法が進んでも、インフォメーションだけではアイデアは生まれない。それは自由な精神活動から芽生えるものであって、ここにはそれを育む伸びやかな、落ちついた、明るい、そしてにこやかな環境があるように思う。今後もそのような雰囲気大切にしたいものである。

* * *

◇参考文献

- 1) 「塾」, 49号 p. 29 (1971); 「工学研究科履修案内」 p. 39 (1977).
- 2) J. Phys. Soc. Japan, 18 744 (1963).
- 3) J. Phys. (Paris), 25 568 (1964).
- 4) J. Inorg. Nucl. Chem. 31 943 (1969).
- 5) J. Phys. Chem. Solids, 38 1209 (1977)
- 6) Physica B86 1005 (1977).
- 7) J. Appl. Phys. 48 2139 (1977).

＜研究・教育情報センター刊行物の案内＞

本部事務室

- 慶應義塾大学受入雑誌リスト (P I C C-1) 昭和52年版

三田情報センター

- 慶應義塾図書館蔵和漢書善本解題 昭和33年11月刊
- 慶應義塾図書館史 昭和47年4月刊
- 足尾鉍毒事件と田中正造資料展目録 昭和51年10月刊
- コルディエ文庫 欧米人の中国研究書展示目録 昭和51年10月刊

連絡先：港区三田2-15-45 (〒108) 電話 (453) 4511

情報センター本部事務室 (内) 3027 三田情報センター総務 (内) 3413

Padova 雑感

有 働 勤 吉

筆者は1974年から76年にかけて、北イタリアはベネチアにほど近い Padova 大学の哲学史研究所に留学した。Padova 大学は1222年に創立された700年の伝統をもつ名門大学で、殊に15世紀にはヨーロッパの学芸の中心として名声を博し、コペルニクスやニコラウス・クザーヌスをはじめ当時の多くのヨーロッパ中の俊英がこの大学で学び、ガリレオは1592年から18年間ここで研究生生活を送ったのである。そのせいか Padova の人びとは由緒ある自分たちの町に誇りをもっており、Venezia が商都なら Padova は学問の都だと、お国自慢をよく聞かされたものである。こういったお国ぶりのせいか、彼等は議論が好きだしまた上手である。議論の相手の言い分をよく聞き、正しく評価した上で、それから ma (けれども) と前置きして相手の意見の足りないところを指摘する。1つのテーマについて反対意見を取りこんだ形で、自分の意見を主張するこのイタリア式論証術の背景に相手の長所をまず認め、しかもその欠点をも見過さないという、彼等のしたたかな生き方の知恵を垣間見た思いがした。

ここ Padova でも、勤め人の多くは、正午ともなると家に帰って昼食をとる。ラッシュアワーが1日のうちに4回もあるとか、仕事の能率がおちるとか、国の内外からとかくの風評があっても、彼等はたっぷり時間をかけて「家庭」で昼食を楽しむという習慣を変え

ようとはしない。但し朝はコーヒーと菓子パンだけですます彼等にとって昼食は1日のうちでいちばん重い食事なのだ。勤め先から帰ったご主人、午前中で学校をおわった子供たちをまじえて、奥さんが手間ひまかけてつくった前菜からデザートまでのフルコースをたっぷり2時間位かけて楽しむ。「ゆっくり豊かに」がイタリア式食生活の特徴である。多くのイタリア人にとって「家庭」は生活の中心で、世間という嵐が吹き荒れる大海に浮かぶノアの箱舟である。そしてこのイタリア的家庭は家長の権限が強い父権家族のように見えるが、私の経験では、家庭の中でいちばん

愛され、尊敬されているのは婦人 donna である。私は Padova や Venezia の古びた街なみの外壁の一角にひっそりと祭られている聖母像をよく見かけたが、人口の99パーセントがカトリック信者であるといわれるイタリアに今なお生きつづけている聖母 Madonna に対

する厚い敬愛がこの隠れた女権国家イタリアを支えている精神的支柱なのだ実感した。

イタリア人は老いも若きも、男も女もよくぶどう酒 vino をのむ。経済危機が叫ばれつづけているイタリアだが、vino の年間飲酒量は1人当たり100ℓ以上で、EC9ヶ国中トップだというから驚きである。大学の学生食堂の定食に vino の小瓶がついていたり、電気工事のおじさんにワインをお茶代わりに出すお国柄であってみれば、この数字もなるほどとうなずける。Padova でイタリア人の家庭へ夕食に招かれる機会が何度かあったが、食卓の立役者は vino のようだ。主人が吟味して整えた年代ものの vino が食卓に林立する様は壮観である。(以下18ページへ続く)



重要文化財に指定された相良家文書

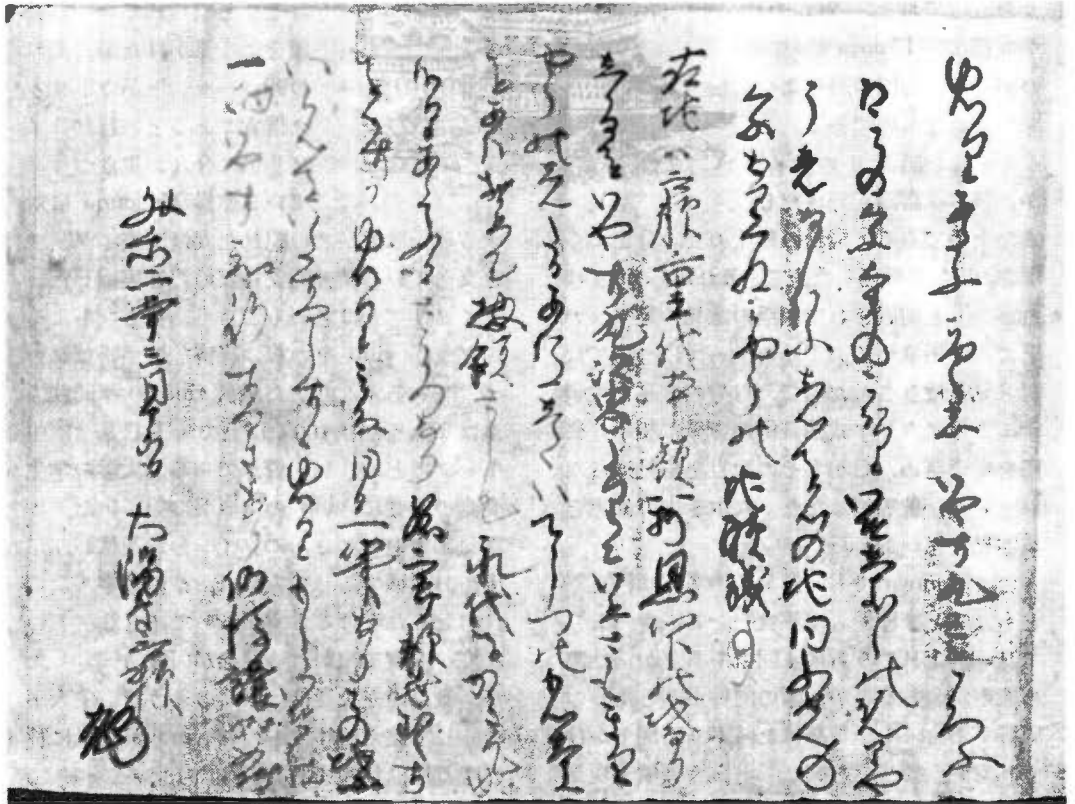
10余年前本塾の所蔵に帰した相良家文書がこのほど国の重要文化財に指定された。周知のとおり文化財の指定には国宝と重要文化財とがある。国宝は重要文化財のうちより特に学術的価値の高いもの、または特に美術的に優秀なものが選ばれるので新しく指定されるときは通常重要文化財指定である。

塾所蔵の相良家文書は総点数1,200点を越え、ほかに日記、絵図若干と鑑の小札、胴具足の残欠が含まれている。年代的には鎌倉時代はじめより江戸時代中期にかけてのもので、保存状態

も極めてよく、特定の家の文書がこれだけ一貫して残されている例は稀である。まともっている古文書の重文指定としては時宜を得たものといえよう。

相良家は鎌倉時代のはじめ元久2年(1205)に平家没官領であった肥後国人吉庄を得て西下し、この地の地頭となった。相良長頼(蓮仏)の時代である。もっとも相良氏の入部はこれよりやや早く、長頼の父頼景が人吉庄の東方の多良木へ下向したといわれるが確証はない。その後もその一族が各地へ拡がり、肥後国から遠く

相良定頼讓状(文和2年3月16日)



豊前国に所領を得たものもあった。鎌倉末から南北朝時代、ついで室町、戦国両時代近隣の島津、大友などの大豪族と紆余曲折はあったが無事のり越え、江戸時代に近世大名として残り、その本貫の地、人吉2万2千石を領し、明治維新に至ったのである。このように同じ土地に在って700年余生き延びられた家は甚だ稀で、しかもその家の文書が散逸することなくうけ継がれてきたことはまことに珍しいことである。本文書が貴重である所以である。

相良家文書は、鎌倉時代のもの63点、南北朝時代のもの(建武より元中・明徳の頃まで)128点、室町戦国時代のもの(天正10年まで)約500余点、残りが江戸時代のものとなる。いずれの文書も保存がよく、やや薄手の紙(雁皮様のもの)による裏打がされているほか、ほとんど原形を変えることなく、生^{うぶ}な形で伝えられており、文書の様式・形態などを古文書学的に考究するにも有益な文書群である。つまり巷間みられるような巻物や軸物に表装されたものではなく、また差出者が文書を包んだ懸紙^{かけがみ}(今日の封筒の役を果すもの)も保存されていることが多い。

この文書は慶應義塾へ移る以前より用いられていたうるし塗りの木箱(2つのヒキダシのつ

いたもの)に収められ、それぞれ第1号子丑より第10号までの10箱にわけられている。

相良家文書はこれまで何回かにわけて展示がおこなわれたが、近年は去る46年5月に図書館記念室で三田情報センターの主催により慶應義塾所蔵中世古文書展が開かれ、相良家文書より20余点が出品された。4日間の展示に1,000人を越す観覧者があった。また50年7月には日本古文書学会東京部会のために20点ほど展示され、内外の古文書学者の目を楽しませた。

挿図として入れたものは南北朝時代の当主相良定頼が嫡子いやす丸に所領(土地)を譲った時のもので、かな書きのため少しよみにくいが興味深い史料である。

なおこの貴重な相良家文書が塾の所蔵となるに当たっては当時文学部で古文書を講ぜられていた伊木寿一先生と図書館長であった野村兼太郎氏の力が大きかったことを付け加えておきたい。(文学部教授 高橋正彦)

◇参考文献

文化庁編「相良家文書目録」昭和52年3月
東京大学史料編纂所編「相良家文書」2冊
慶應義塾三田情報センター「慶應義塾所蔵中世古文書展目録」昭和46年5月

新図書館・研究室棟(三田)建設調査委員会の答申について

老朽化の著しい赤レンガの現図書館に代る新しい図書館を建設して欲しいという三田情報センターの要望に応じて、久野塾長(当時)は昭和51年暮に三田の学部長や情報センター所長を主な委員とする新図書館・研究室棟(三田)建設調査委員会を発足させた。この委員会は全部で5回の会合を重ね、同時に現図書館や九州大学、同志社大学等の最近の図書館を視察する等の調査活動を行って本年5月、久野塾長に対する答申をまとめた。それによると、現研究室棟

の北側部分に総面積を5千坪程度とする建物を建設し、そこに百万冊の図書を架蔵できる書庫と千席の閲覧席とを有する情報センターの施設、並びに文経法商4学部・大学院研究科の共同利用施設を収容するよう提言されている。また答申はこの建物を昭和55年度末までに完成するよう要望している。6月に交替した新しい理事会がこの趣旨を尊重して、答申に沿った建物を建設することが期待されている。

理工学情報センターの1つの役割

小川 治 之

(理工学情報センター係主任)

◇はじめに

小金井にあった工学部

図書館が矢上に移り、理工学情報センターとして、研究・教育情報センター機構に組み入れられて5年を経たことになる。新図書館にはもはや建物はもとより、予算からも、職員数からも、小金井時代の面影を残すものは見られない。勿論、こうした物理的な面のみが一新されたわけではない。この5年間、理工学分野の新しい情報センターに育てようとする関係者一同の懸命の努力の結果、理工学情報センターは、工学部にとってもまた地域の研究機関にとってもなくてはならない存在に、いつの間にか成長して来ているように思われる。

本来、ここで近代図書館への胎動が始まった昭和41年から今日までの10年間を、もう一度振り返って今後の方向を探るべきであるかもしれない。しかし本稿ではその余裕がないので、この5年間、ある意味では一番顕著な成長を見せた複写サービス部門を取り上げ、これを中心に、当センターの置かれている立場を概観してみたい。

◇理工学情報センターの理念

本稿で複写サービス部門を取り上げた理由は、このサービスが現段階で当センターの持つ理念を一番如実に現わしていると思われるからである。即ち、当センターは工学部の矢上移転の計画の意図を汲んで、小金井時代の図書館のイメージから脱却すべく、新しい構想の下にその実現を計って来た。その詳細については今立入るわけには行かないが、その中心的機能としては、i) 学生用、

ii) 研究者用、iii) 公共用の3つが上げられていた。¹⁾

i) 及び ii) は大学付属図書館としては当然の機能であるが、iii) の意味として、“公共用として始めから収集その他の面で特別の方策を構ずると言うこともある程度含んでいるが、本来は工学部に対して実施されたサービスであっても、学外利用者に利用可能な部分があれば、その部分は積極的に公開して利用に供しようということである。”²⁾としている。こうした当初の基本姿勢は、1970年の「理工学情報センター計画の概要(案)」³⁾の中で正式に発表されている。即ち、任務として上げた2点のうちその1は、“理工学に関する各種の情報の探索、整備、利用、伝達等の便宜を提供することにより、義塾における理工学研究、教育の能率向上に奉仕する”という大学付属図書館の立場であり、その2としては“塾外、理工学分野の研究、教育機関一般に上記に準ずる情報サービスを行い、その研究活動を援助する”とし、理工学分野の公共図書館としての立場を明確にしている。こうした大学を基礎としながらもその枠を越えようとする専門情報センターの考え方は自然科学の持つ研究体制を反映させたものである。例えば当時東京工業大学付属図書館長であった桶谷繁雄氏も「大学付属図書館はいかにあるべきか」の中の私案として、“東工大図書館を京浜地区における科学技術情報センターを志向する”と規定し、さらに“このため、東工大の収蔵の資料を対象事業体と直接結ばれるシステムを考えておく必要がある”とまで述べている。⁴⁾ 丁度同じ頃に国立大学の、しかも理工学の単科大学として最大規模を

誇る大学の図書館長が同様のことを志向していたのは興味深いものである。慶應義塾にこうした理念の生じた背景には、当センターがかって我国唯一の理工学分野の公共図書館的役割を果たしていた藤山工業図書館の運営の精神を伝統的に継承しているという事情があることも忘れてはならない。

ともあれ、当センター発足後わずか5年ではあるが、先人のこうした基本姿勢は一貫して生かされて学の内外からも一定の評価を得るまでになったが、同時に今後の課題も徐々に顕在化しつつある。

◇理工学情報センターの蔵書

ところで対象が学内であっても、その枠を広げても図書館としての諸サービスを行う上の基礎は蔵書の、しかも自然科学では雑誌の充実である。現在でこそ継続中の雑誌は和洋合せて2,000誌、バックは7万冊近くを数え、私学の理工学図書館としては有数の図書館となっているが、小金井時代には一寸とした雑誌となると学内では見られなかった。蔵書を補強する面で大きな力となったのが日本科学技術情報センター（JICST）との提携であり、具体的には、JICST 所蔵の雑誌バックナンバーを継続的に受贈するという契約である。改めて説明するまでもなく、JICST は科学技術庁傘下の特殊法人であり、抄録誌の編さんを中心

に幅広い情報活動をしている理工学分野の我国では最大の情報センターである。雑誌を中心とした年間図書予算が3億円といわれるから、全塾の図書予算を理工学分野にかけていることになる。丁度新図書館計画を立案している昭和44年6月に、JICST より収集後5年以上経た雑誌を譲渡するので受贈希望の有無を問い合わせるアンケートが出された。対象は1958年から1963年までの外国雑誌約2,000種、国内雑誌約500誌の12,000~13,000冊であり、且つ次年度以降も逐次譲渡するというものであった。結果として当センターと東京農工大学図書館に分割して譲渡が決定し、以来今日まで表1に示した如く毎年新規増加分を含めて寄贈を受けており地域の企業より寄贈されたものを合せ、当センターの蔵書の一部として利用されている。

◇理工学情報センターの複写業務

ここでは過去5年間の複写サービスの推移をデータを通じてながめてみたい。

表2は過去5年間の複写部門の件数を中心とした実績であり、図1はこの表をグラフ化したものである。利用者群を大別すると、i) 工学部学生を中心とした学内一般、ii) 研究費支払いによる研究者、iii) JICST からの依頼、iv) 一般の学外利用者（企業、大学、個人）の4グループである。

表1 JICST 寄贈雑誌総計

受 入 年 (発 行 年)	1971 (1958~63年分)		1972 (1964年分)	1973 (1965年分)	1974 (1966年分)	1975 (1967年分)	1976 (1968年分)	計
洋 雑 誌	1,546種 8,066冊	1,062種 1,795冊	1,464種 2,735冊	1,326種 2,358冊	1,545種 2,656冊	1,547種 2,732冊	1,719種 2,927冊	10,209種 23,269冊
和 雑 誌	496種 1,698冊	616種 872冊	952種 1,383冊	1,455種 1,912冊	1,382種 1,872冊	1,997種 2,491冊	2,015種 2,581冊	8,913種 12,809冊
計	2,042種 9,764冊	1,678種 2,667冊	2,416種 4,118冊	2,781種 4,270冊	2,927種 4,528冊	3,544種 5,223冊	3,734種 5,508冊	19,122種 36,078冊
外国特許明細書		264冊	428冊	478冊	533冊	679冊	350冊	2,732冊
原子力レポート		76冊	85冊	49冊	0	222冊	0	432冊
総 計	9,764冊	3,007冊	4,631冊	4,797冊	5,061冊	6,124冊	5,858冊	39,242冊

表2 理工学情報センター複写実績 (I)

	1972		1973		1974		1975		1976	
	件数	枚数	件数	枚数	件数	枚数	件数	枚数	件数	枚数
JICST	7,860 24.8	65,557	8,974 21.9	75,784	10,436 23.3	90,671	10,952 28.5	93,219 17.8	13,556 34.2	116,070 21.4
学 外	2,286 7.2	—	3,836 9.4	—	4,940 11.0	—	5,347 13.9	46,930 8.9	5,042 12.7	46,982 8.7
学 内 (一 般)	17,437 55.0	—	24,234 59.3	—	25,749 57.4	—	18,233 47.4	299,575 57.1	17,167 43.3	285,709 52.7
学 内 (校 費)	4,169 13.1	—	3,857 9.4	—	3,705 8.3	—	3,911 10.2	84,854 16.2	3,884 9.8	92,926 17.2
総 計	31,752 100.1	—	40,901 100.0	—	44,830 100.0	—	38,443 100.0	524,578 100.0	39,649 100.0	541,687 100.0

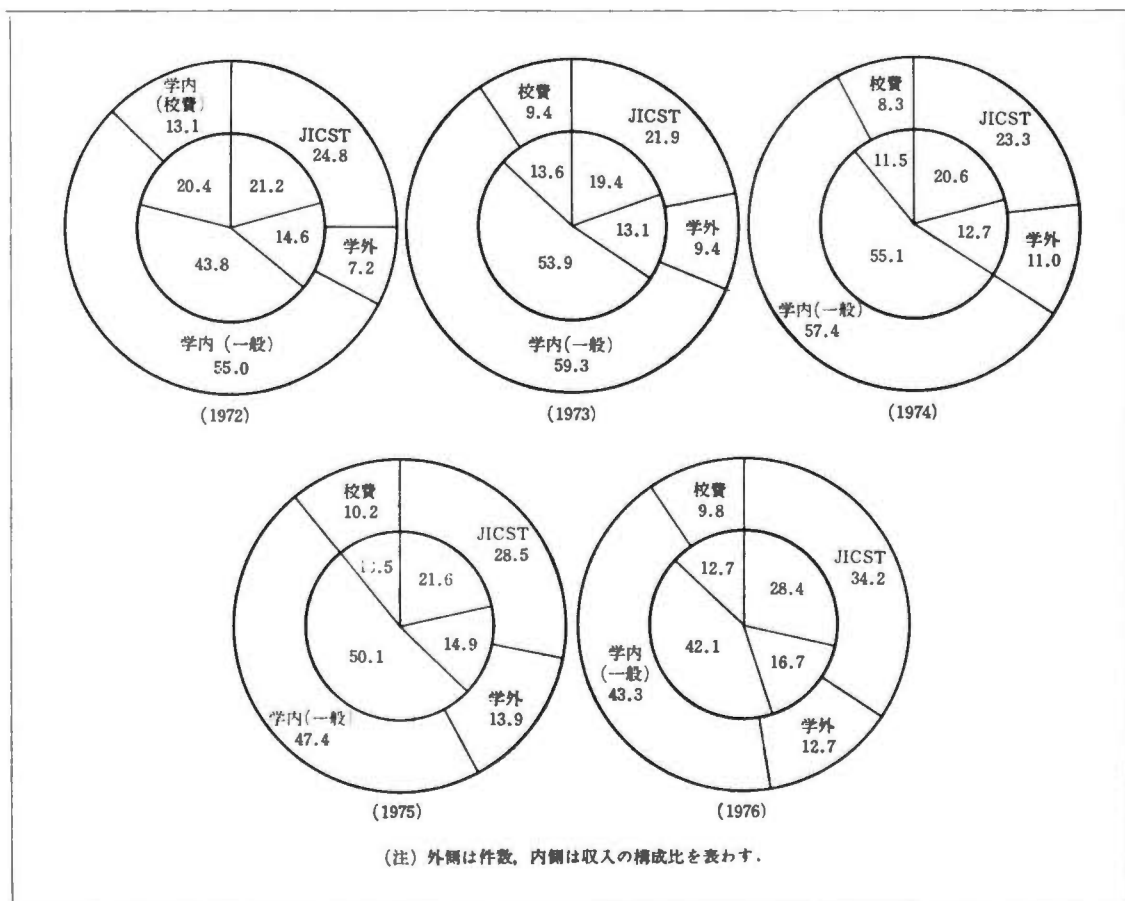


図1 理工学情報センター複写実績 (II)

1975年に見られる総件数の大幅な低下は、この年より学内利用をキーカウンター方式によるセルフサービスに切り替えたため、統計の基準をそれまでの1件1枚の申込みから1回1枚の申込みに変えたことによるものである。その他の利用は当然ながら増加を示している。

円グラフはこうした現状を各グループ単位にとらえ、且つ全体に対する割合を示している。円の外側は件数、内側は収入の構成比をそれぞれ示す。4グループをさらに学内、学外の2グループに分けると、件数、収入とも当初のおよそ7対3の比率が次第に接近し、5年後の1976年にはほぼ同率を示すようになった。グラフから学内利用が頭打ちの反面、特に“JICST”の著しい増加を知ることができよう。特に学内利用は最近各学科で複写機を備えたため、学内の校費による利用は今後一段と減少するものと思われる。既に最近の雑誌のオーバーナイト貸出の増加現象がこの見通しを裏付けている。

ここで少し“JICST”の複写について説明の必要があろう。各企業体では、JICSTに対し、主として科学技術文献速報（全理工学分野を対象とした抄録誌）に基づいて複写の注文をするが、その中には既に譲渡済みのものに対する複写が含まれている場合がある。JICSTではこの分をそれぞれの譲渡先に回送しているが、JICSTから複写の注文がある場合は、これに速やかに応じるというのが雑誌譲渡時の条件となっている。この部分を当センターでは“JICST”と称している。図表が示すようにこのサービスは現在では外部からの依頼の3分の2を越す状態にあり、さらに今後も増加していくものと思われる。

“JICST”以外の学外とはJICSTを経由しない直接の利用者で、大学図書館の場合は一般に相互貸借制度に基づくもの、その他京浜工業地区を中心とした企業の研究機関や個人の研究者の利用であり、このグループからの依頼はこの1～2年一定のレベルに落ち着いている。

いづれにせよ複写依頼は、今後急激な上昇は見

られないとしても、着実に増加するであろうことが過去のデータからもいえるようである。

◇おわりにかえて

これまで理工学情報センターの有する基本姿勢の中に大学図書館ではあるが、利用できるサービスは学外に対しても公開し、特に地域の情報センターの役割を果そうとする姿勢があることを明かにし、そしてその一番顕著な成果としての複写サービスの実績について述べて来た。井上如氏⁹⁾が専門図書館協議会発行の「専門情報機関総覧」の中の『連絡を密にしている外部情報機関』の項を集計した報告の中で理工学情報センターが上位にリストされていることから、このサービスが企業体関係者の間に定着しつつあることが伺える。そして理工学情報センターとして発足して5年を経た現在、大学図書館としても、地域の情報センターとしても、第1期の基礎固めの段階から新たな段階に入りつつあることが感ぜられる。大学図書館の機能から見ると、資料整備・図書館サービスから利用者のための情報サービスへ移行する第一歩を印したものとさえいえる。また、次のステップとしては、デポジット機能の確立させることが、重要な課題ではなかろうか。情報サービスの充実と相まって、井上氏のいう“そこへ行けば何かあるだろうという資料の集積効果と、そこに問合わせれば誰かが何かを教えてくれるだろうという情報の蓄積効果”が一体となった情報センター機能が発揮できるものと思われる。“少くとも資料の集積効果を抜きにして利用者の期待に応じることはできにくい”ことを先の調査の結果から井上氏も指摘している。ことに“資料の集積効果”は大学が社会に果すべき大きな役割といえよう。反面企業の図書室は、年々増加の一途を辿る資料に既に収容能力を越えて来ている。こうした事情から、大学のデポジット機能の確立を要望する声は徐々に大きくなっている。企業体図書館の団体ともいえる専門図書館協議会においても今年から「デポジット・ライブラリー研究小委員会」

を発足させ検討を始めている。

以上、勝手なことを述べて来たが、勿論結構づくめであろうはずがない。例えば、企業体のデポジットを云々している当センター自身が既に収容能力の限界に達している。しかしながら、種々の制約を乗り越えて、当センターが、研究者・学生を側面から支援すると同時に、学生の卒業後の研究、生涯教育の寄り拠の1つとして果さなくてはならない役割は大変大きい。殊に工学部は、大半の学生が企業のエンジニアとして巣立っていくところである。その彼等が当センターに利用者として戻って来るのを見ることが出来るのは、現場に働く者のささやかな喜びである。

* * * * *

<2ページより続く>

SCIENTIFIC ELITE (松浦保)

ノーベル受賞者たちの変遷も、さながら科学の世界のエリート交替論である。とはいえ、ここで注意すべきことは、この世界のエリートは、僻地から徒手空拳で生れたわけではない。まったくのアウト・サイダーが登場する可能性のある政界や財界とは異ってことに現代においては、指導者も設備もそろった、良い研究環境のなかにのみ育つものなのである。

現在、経済学の分野においても、この学問の行きづまり状態を打破するために、新しい学問的エ

* * * * *

<11ページより続く>

Padova 雑感 (有働勤吉)

ロココ調の家具で飾られ、天井の高いゆったりした食堂で、vino を片手に心づくしのフルコースの食事が終わる頃には、日本人の小さな胃袋は満杯になり、目の前が暗くなったことも一度や二度ではなかった。経済の破産とかイタリア病が取沙汰されているイタリアでのこの質量ともに豊かなイタリア式食生活の現実にあつて、私はGNPなどという物差しでは計ることのできない別種の豊かさがあることを思い知らされた。しかも彼等にとって物質的な富とか豊かさは、それをどれほど多く積んでも贖うことのできない人間の「魂

◇参考・引用文献

1. 中島紘一 新しい出発に備える慶應義塾工学図書館, Library System 6(1): 4~28, 1967
2. ibid p. 21
3. 大沢充 理工学情報センター計画の概要(案), 八角塔 6: 6~12, 1970
4. 桶谷繁雄 大学付属図書館はいかにあるべきか? 一東京工業大学の場合一, 財団法人大学規準協会々報 21: 35~9, 1971
5. 井上如 情報サービス機関案内, 情報管理 19(12): 940~4, 1977

リートの出現が切に待たれている。しかしこの世界のエリート出現にとって良い研究環境が必要であるとしたならば、ここで十分に考えておかなければならないことは、その環境を支配するのは、すでに確立したエリートたちであり、その勢力の破壊を通して新しいエリートが出てこなければならない。これはさきわめてむずかしい。学問的危機に対応するためには、新しいエリートが育つように、研究環境の柔軟さがどうしても必要であることがわかる。(経済学部教授)

(経済学部教授)

* * * * *

の豊かさ」の実現のための道具にすぎない。そしてここにイタリアの英知がある。福沢諭吉が「西洋事情」の中で、「専ら知らんと欲することは、十全辞書を調べても詮索の届かざる事柄のみにあり」と言っているのは、近代西欧の文物がそれとの対決において形成された西欧文化の古き良き伝統であるギリシャ以来の学問にみられる人間的英知と中世において培われたキリスト教的英知のことではなかったのかと考えさせられた。

(文学部教授)

視聴覚メディアと図書館の接点

渡部 満彦

「週刊朝日」5月27日号に川崎医科大と聖マリアンナ医大について署名記事が載っていたのをご記憶の方もあろう。その中に我々図書館員にとって興味ある話が挿入されている。《丘、六年生には、八人一室の勉強部屋が校舎の中に与えられるし、図書館には約四十の個室が用意されている。同図書館の本はすべて開架式で利用しやすくなっている。このため現在計千百冊が紛失中だが、「盗まれたとって怒るより、とにかく学生が利用した証拠」と鷹揚である。》これは川崎医科大の記述である。

今春、筆者は大阪大学と川崎医科大の図書館を見学する機会に恵まれた。阪大中之島分館は館員一同がきびきびとしており、如何にも西の医学図書館界の雄という感じであった。また川崎医科大図書館は、瀟灑な建物の閑静な環境の中で落ち着いて仕事をして居られた。そこには新生の医科大として一歩一歩伝統を築き上げて行こうという気概さえ感じられた。

「週刊朝日」の記事は《また、今の学生が視覚世代だということが配慮されたわけでもあるまいが》というブン屋特有の皮相的言辭を前置として《病理や薬理などの実習に使う「多目的実習室」では、一人当り一台のテレビを備え付け、テレビを見ながら授業を受けるのである。その授業はすべてビデオテープに収められるから、欠席しても独習可能。テープさえあれば、予習、復習までビデオでできる仕掛だ。》筆者が見学させていただいたこの「多目的実習室」には教授工学の粋が尽

されていると言っても過言ではなかった。この実習室が基礎系、臨床系の授業で具体的にどのように運営、利用されているかは春休みということで見学不能であったが、筆者に興味深かったのは、これらの施設と図書館がどのように協同しあい、或は今後協同しあわなければならないかという点にあった。そしてこれを考えることは、従来の図書館という枠を超えた、真の情報センターとしての夢を無限に拡大してくれる。

図書館・情報学では視聴覚メディアは情報の担体として図書と同等の価値を有している。医学系では図書以上の力点を持っているとも言える。それは医学系出版物に「Colour atlas of ...」、「図説...」とか「...図譜」が氾濫し、手術の具体的手順が映写フィルムに収められ、また「高血圧症の眼底検査」がカセットテープとスライドで連動するというようなことで証明される。

L.L. にしろ、「多目的実習室」にしろ、先生と学生との視聴覚メディアによる知識の授受に当っては資料的(document)要素は不可欠であろう。この時、従来の図書の形式による資料ではこのメディアに乗せることはできない。具体的な話はさておき、次のような夢を語って本稿を終えよう。

多目的実習室からインターホンでN教授によって「川崎病」の臨床例の文献が情報センターに依頼される。係員は直ちに電算機でそれを検索し、該当資料が音声に変換され、必要図版がカラーでブラウン管に映像される。N教授は必要個所で資料を中断し、説明を加えて授業が続く。参考文献が独自の検索システムで学生に与えられ、必読文献は手元の複元器でコピーとして学生は入手できる???

(医学情報センター係主任)



日吉情報センター藤山記念図書館利用の一断面

—学部学生館外貸出記録の調査から—

関 洋

(日吉情報センターP・S課)



日吉情報センター藤山記念図書館が地下書庫をオープン化し、全

面開架方式の図書館となったのは、1976年4月7日のことであった。この新たなスタートから、はや1年と数ヶ月が過ぎた。

76年度1年間に図書館の館外貸出を受けた学部学生は、延15,864人で前年度の約1.3倍、貸出冊数では、21,467冊と前年度の約1.4倍、と伸びを示した。一日平均57人、78冊の館外貸出があったことになる。

パブリック・サービス課事務室の掲示板には、毎月の貸出実績を示す折線グラフがあるが、今年度の出足も仲々好調のようである。

今後も、現状に満足することなく、よりよいライブラリー・サービスを行なっていくことが必要であるが、そのためには、利用者の動向を掴むこ

とが不可欠であろう。拙稿は、その目的のために行なっている調査の一つをとりあげ、日吉情報センター藤山記念図書館の一断面を報告するものである。

調査は、6月23日現在で館外貸出中の図書について、サーキュレーション・カウンターで管理しているブックカードをもとに行なった。目的は、この図書館では「どの分野の図書の利用が多いか?」、「どの学部生の利用が多いか?」、更に、「分野・学部別の利用の傾向」を、数量的に計ることにある。

ここで対象となった図書は、レファレンス室に置かれている参考図書類、及び逐次刊行物類を除いた一般図書、約8万冊であり、先にふれたとおり、すべて開架式書庫にある。

調査時の学部学生による館外貸出図書数は883冊である。NDCに従った分野別では、社会科学

			法 (政)							文
			経		工					経
			法 (法)							法 (法)
										工
					医					商
										法 (政)
										医
総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	工学・技術	産業	芸術	語学		文学

図1. 分野別 (NDC) 利用率及び学部別利用率 (社会科学, 自然科学, 文学)

295冊(33.4%)、自然科学226冊(25.6%)、文学161冊(18.2%)の利用が高く、以下、哲学66冊(7.5%)、工学・技術62冊(7.0%)、歴史26冊(2.9%)、芸術20冊(2.3%)、総記11冊(1.2%)、語学10冊(1.1%)、産業6冊(0.7%)となる。図1は利用率を図示したものである。

開架式書庫は2階と地下の2ヶ所にあり、以前より図書館では、利用の多い図書を、一般閲覧室、サーキュレーション、カウンターのある2階の書庫に排架するように努めてきた。

現在、哲学、社会科学、自然科学、工学・技術、芸術、文学の6分野の図書が2階にあるが、先の数値からみると、この階で全体の94%をカバーしていることになる。

調査時、館外貸出を利用した学部学生数を学部別(法学部は学科別)にみると、工学部292名(33.1%)、経済学部175名(19.8%)、法学部政治学科140名(15.9%)、文学部96名(10.9%)、法学部法律学科96名(10.9%)、商学部59名(6.7%)、医学部25名(2.8%)となる。これは単純に絶対数でみたものであるが、これを利用率、すなわち各学部の在籍者数に占める利用者数の比率からみると、次のようになる。工学部7.7%、法学部政治

学科5.0%、法学部法律学科3.9%、医学部3.9%、経済学部3.6%、文学部2.6%、商学部1.5%。文学部学生の利用率が低くなるのは日吉の教養課程在籍者が、他学部が2年生までであるのに対し、1年生のみであることからであろう。また、工学部学生の利用率が他学部に比べてかなり高いのは、専門課程の置かれているのが日吉の隣の矢上台であり、利用の便がよいことからであろう。

日吉教養課程在籍者の利用状況について詳しくみてみたいと思う。図2は、日吉在籍者の学部学年別利用者数、及び利用率である。各学部(文学部を除く)とも1年生より2年生と、学年が進むほど利用者数、利用率ともに増加しているのがわかる。特に、工学部2年生の利用が多いのが目立つ。この学部ではレポート提出の課題が多いため、参考となる資料を求めて図書館を利用する機会も多くなっているようである。図書館でも需要に応じ、工学基礎教室との協力で関係部門の蔵書構成の充実を計るなどしており、その結果の現れとみることもできよう。

表1 学部学年・性別利用率(%)

	男 子		女 子		
工	2	15.3	法(法)	2	20.4
法(政)	2	11.8	法(政)	2	13.8
医	2	9.3	医	1	12.5
法(法)	2	7.8	法(政)	1	9.3
工	1	6.5	文	1	8.8
文	1	6.3	商	2	8.6
法(政)	1	5.9	経	2	7.7
経	2	5.8	工	2	5.7
経	1	5.2	法(法)	1	4.8
医	1	4.8	工	1	4.8
法(法)	1	2.8	経	1	3.9
商	2	2.8	商	1	0.0
商	1	1.8	医	2	0.0
全		6.3	全		8.8
日 吉 全					6.6

日吉在籍者全体の利用者数は726名、利用率6.6%であるが、これを表1により男女別にみている

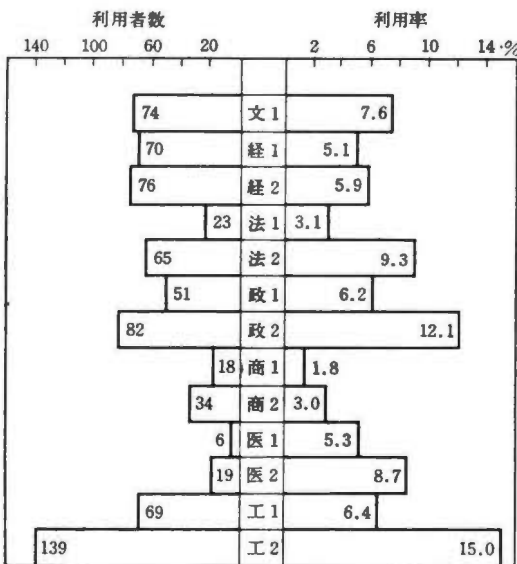


図2 学部学年別利用者数・利用率

と男625名, 6.3%に対し, 女101名, 8.8%となる。学部学年別の男女の利用率では, 法学部法律学科2年女子が20.4%と極めて高く, 次いで, 工学部2年男子, 15.3%, 法学部政治学科2年女子13.8%, 医学部1年女子12.5%, 法学部政治学科2年男子11.8%と10%台を記録している。人文社会科学系では経済学部1年を除いて女高男低であり, 自然科学系では医学部1年を除き男高女低となっている。

最後に全学部学生を対象に分野, 学部別の利用傾向をみてみたいと思う。図1に戻り, 利用の多い社会科学, 自然科学, 文学の3分野について学部別の利用率をみると, 前2者が各々, 社会科学系学部, 自然科学系学部の利用者がほとんどであるが, 文学についてはその一般性からか利用者層が広がっている。

表2 学部・分野別利用数

	文	経	法 (法)	法 (政)	商	医	工	全
総記	3	3	0	4	1	0	0	11
哲学	14	31	4	8	8	0	1	66
歴史	4	13	0	5	4	0	0	26
社会科学	15	78	67	104	18	0	13	295
自然科学	1	6	0	0	3	17	199	226
工技術	3	1	0	0	3	1	54	62
産業	0	2	1	0	2	0	1	6
芸術	4	1	3	6	1	0	5	20
語学	3	1	3	0	2	0	1	10
文学	49	39	18	13	17	7	18	161
全	96	175	96	140	59	25	292	883

次に表2から各学部の分野別利用数を見ると, 前記の結果と対応するかたちで, 自然科学系の学部については, その主題とする分野の図書の利用

がほとんどであり, それに次ぎ文学の図書が利用されている。社会科学系の学部については法学部2学科と経済学部, 商学部の2学部とではやや傾向が異なり, 前2者の特定分野への集中度がより強くなっている。

図書館では日吉開講の授業に応じ, 学習に必要な図書を整備するように努めてきている。

この調査でも, 図書館の利用が, 授業方式, 内容とかなり直接に結びついていると判断される結果がでてきている。このささやかな調査で知ることのできるのは, 図書館利用のほんの一断面であるが, 更に別の角度からの調査を行なうとともに, 日頃のカウンターでの利用者との直接の応対を大切に, 学生生活のハートとなる図書館を共に築いていきたいものである。

研究・教育情報センターの職員研修計画

研究・教育情報センターの各支部では, 必要に応じ以下の様な職員研修を計画・実施している。

<情報センター本部> コボル教育改善研修

人事部主管の新入職員研修の一環として本部が担当する電算機教育の講師を対象とする。コボル教育の改善と充実を目的として, 講師間の意思疎通と教授法の検討, 教材の共同作成等に当る。

<三田情報センター> 政策運営研究会

センターの発展・充実をめざし, 種々の基本方針や課題を設定し, 長期・短期に亘る改善を図ることを目的とする。

<医学情報センター> 医学概論の講習

司書資格を有する(及び, 準ずる)職員を対象に医学部教員による講習を行い, 医学情報サービスに従事する上で必要な基礎的・主題知識の修得を図る。

<理工学情報センター>

1. 理工学分野の主題知識の向上, 及びより密接な情報サービス業務の遂行を目的として工学部教員による講習を行い, 研究に必要な文献やサービスについての懇談も行う。
2. 業務処理の能率向上を目的として, 業務上必要な語学(ロシア語)の研修を行う。

明石屋六兵衛版『鎌倉絵図』

(江戸中期刊 本館幸田文庫所蔵)

白石 克

(三田情報センター 整理課)



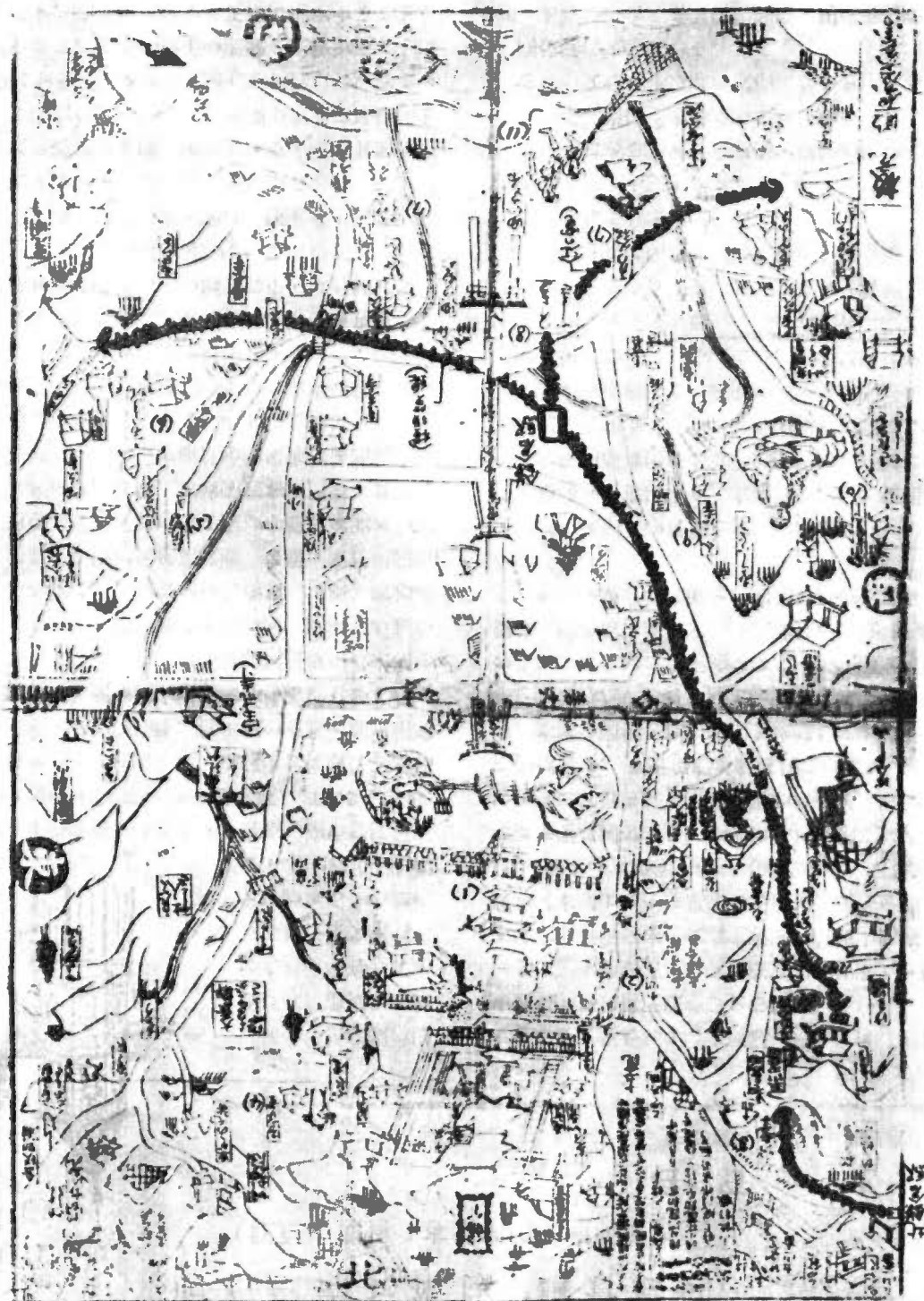
鎌倉の絵図類の出版は江戸前期より始められ、現存している万治～寛文頃刊本といわれるものだけでも、大和屋庄左衛門版等4版を掲げることができる。次いで江戸中期では延宝6(1678)年 松国版、貞享3(1686)年及び元禄4(1691)年 斎藤庄兵衛版、元禄16年 斎藤六郎左衛門版、無年記の斎藤七郎左衛門版、霽版、本図の明石屋版等がある。しかしながら、最も多く刊行されたのは江戸後期から末期にかけてである。私の知るものの内、出版元のわかるものだけでも、大坂屋孫兵衛版 4版、常陸屋伊三郎版 4版、丸屋富蔵版 2版、家根屋四郎右衛門版 2版(この内1版は本館所蔵33×—52—1)、戸川版 2版、石渡弥惣右衛門版 2版と二之宮版、小林弥三郎版、絵図屋弥左衛門版、須原屋茂兵衛版の各1版と、全20版を掲げることができる。その他、無刊記のものも数点管見している。この内、江戸の須原屋茂兵衛と江の島の絵図屋弥左衛門を除けば、版元はほとんど鎌倉住の人々と思われる。これらの版元の中には八幡宮周辺にて宿屋や回遭問屋を営んでいるものが多い。江戸後期以降の絵図では刊記に、版元名のみで、刊行年記のないものがほとんどである。従って、刊行年代を推定する際、図上にある名所の有無を利用する機会が多い。これら後期の版元では絵図と同時に小冊子「鎌倉名所記」を刊行していることが多いので、この小冊子の記載と比較することによっても、刊行年代をより正確に推定することが

できるかと思われる(名所記については「斯道文庫論集」第14輯所収拙稿を参照願いたい)。

さて、本図明石屋六兵衛版(本館所蔵)と同版本は本塾新研究室古文書室所蔵野村兼太郎博士旧蔵本(本図よりやや早印)の他に、所在を聞かない、「鎌倉—古絵図・紀行(東京美術 昭和51)」には未所収図である。本図は江戸後期には降らない時期に刊行されたものと思われるが、版元名のみ刻記で、刊行年記が記されていない。そこで、本図の図柄を他の絵図と比較して、若干の考察を試みたい。こうした絵図類を見慣れない方の為に、はなはだ学術的ではないが、図上に横須賀線 江の電 鎌倉駅 注記番号C)を補記して、現在の鎌倉の位置との関係がわかるようにした。

本図の図柄上の特徴を見ていくと、

- (1) 鶴岡八幡宮に入り、太鼓橋を渡った正面にある仁王門が楼門である。仁王門については修理の記録を聞かないが、元禄頃以前の図では楼門が多いのに較べて、以降の図では二階が失くなり単層に変っている。この仁王門は同社境内にあるたいとう(大塔)、ごま(護摩)堂、かねつき堂、きやう(経)堂、やくし(薬師)堂、六角堂と共に明治初期に、神仏分離令により、こわされてしまった。
- (2) 八幡宮の小別当が馬場かうし(小路)と記された上にある。元禄～享保頃以降の図柄になると、小別当は下方のくろかね(鉄)井近くに移され、文政6年以降の図柄になると、又本図と同位置に戻っている。
- (3) あらいのえんま(新居閻魔 円応寺)が巨福



此圖係北京城之全圖，其間之宮殿、衙門、街市、坊巷、以及山川、園林、寺觀、塔廟、等項，無不備載。其間之文字，皆係古語，其間之圖畫，皆係古法。其間之比例，皆係古制。其間之方位，皆係古法。其間之名稱，皆係古語。其間之圖畫，皆係古法。其間之比例，皆係古制。其間之方位，皆係古法。其間之名稱，皆係古語。

呂坂上にある。同寺はもと、由比ヶ浜にあったが元禄16年の地震で崩壊し、明確な年代はわからないが、宝永(1704~1711)以降には現在地の巨福呂坂上に移ったといわれている。現存する移動後の最古の記録は享保2(1717)年である。

- (4) 法華堂(頼朝墓)の右側に文政6(1823)年修造の大江広元墓、安永8(1779)年修造の島津忠久墓がない。
- (5) 若宮大路の三鳥居の内、中央の鳥居右方を流れる滑川の右側に、土佐坊やしきがある。貞享2年刊「新編鎌倉志」は本図とは異なり、宝戒寺(八幡宮右方に寺名を補記)近所を比定した。後期の図では、ほとんど、「新編鎌倉志」によっている。同書は正徳3(1713)年以降の後刷本が非常に多く残っている。恐らく、同書は正徳以降に多く流布したのであろう。現在でも、「新編鎌倉志」による位置に屋敷跡碑が建っている。
- (6) 田代くわんをん(観音)とあんよういん(安養院)が別になっている。同観音は「新編相模風土記稿」によれば、延宝8年以降には同寺と一緒にになっている。
- (7) かけ正塔(鎌倉権五郎)ともり久松(主馬盛久)が海岸にある。両者共、享保以前の図にあらわれる。特に後者については、以後“盛久敷皮跡”という名で内陸に入り、道路近くに記されるようになる。
- (8) のりよりやしき(源範頼屋敷)が見られる。より古い図(元禄以前)には付近に和田屋敷も記される。
- (9) 大仏の右に念仏寺が記される。大仏別当の清浄泉寺は正徳2(1712)年に真言宗より光明寺末浄土宗に改宗された。或いはその頃、同寺を念仏寺と呼んでいたのかもしれない。
- (10) 大仏の左上方に光くわんじ(寺)がある。同寺は元禄以前の図にはよく記されるが、現在では廃寺としても知られていない。
- (11) 由比ヶ浜にて、網を引いている漁師が2名いる。江戸中期の図では2名のものがほとんどである。時代が降るほど、人数が多くなり、幕末

になると、網を引く人々は2列になり、漁師は14人、網元らしい1人と合せて15人にもなる。

以上、簡単に11項目をみるならば、本図は正徳・享保(1710年代)の鎌倉の姿であることが推測できる。本図とよく似ている図として、前述の斎藤七郎左衛門版を掲げることができる。本図とはほとんど同一図柄で、海岸にいる漁師・漁船の数さえ一致している。異なる所は大仏の右に念仏寺(9)の記載がないことである、或いは斎藤七郎左衛門版は同寺が浄土宗に改宗した正徳2年以前の図である可能性がある。

従来、こうした図柄のみの比較によって刊行年代を推定することが多かった。しかしながら、江戸時代に休み茶屋や宿屋で発売されていた絵図が今日の最新地図のように、年々の緻密な改訂が加えられていたとは考えられない。同じ版元にて再版が行なわれる場合には、かぶせ彫りによる場合が多く、同一内容になることが多い。又前掲「鎌倉名所記」を例に引けば、文政6年修造の毛利季光の墓が初めて記されるのは30年後の安政版である。こうした地方の絵図は、同時期の“江戸図”“京都図”“大坂図”とは大いに異なり、いずれも粗雑な料紙(本図は4紙の貼り合せ)による稚拙な印刷であるので、より古様に見え、刊行年代の推定は難しい。本図も又、磨滅した印面から見ると、或いは元文・寛保(1740年代)迄降るのかもしれない。しかしながら、大仏や漁師の顔形には享保年中(1716~1736)の刊本の挿画に共通する特徴がうかがえる。今の所、〔江戸中期刊〕或いはやや詳しく〔享保頃刊〕とでも推定するのが無難かと思われる。

(66×47cm。四周単辺56×38.5cm)

三田図書館・情報学会
昭和52年度研究大会のお知らせ

日 時:11月12日(土) 10:00~5:00
場 所:慶應義塾大学三田校舎 522番
申し込み先:三田図書館・情報学会
電話 03-453-3920

なお、記念講演として、沢田允茂文学部教授
「思考の進化」を予定しています。

図書館。そして本の選択

岩野節夫

私の本に対する最初の意識的な選択は、小学生の頃、「講談社の絵本」「少年倶楽部」「譚海」、などの雑誌を友人から借りて読むことから始まり、やはり借りることが多かったが、高垣幹、山中峯太郎、南洋一郎などの著作を読みあさることになった。

中学校（岡山県北部津山市にあった。旧制で、今のように学区制ではなかったの、他県から入学者も多く、かなり広範囲の本の名前を耳にすることができた）に入学すると、江戸川乱歩、横溝正史などの著書を貸本屋から借りて読むことが多くなる。そして古本屋で気に入った本を漁るのが日課のようになった。ボードレール、ランボー、中原中也、富永太郎などの詩集を読んだのがその頃である。やがて、出来たばかりの図書部に入部し、中学校図書館の数千冊の蔵書を先生の指導のもとで、他の部員とともに整理・分類する作業をつづけた。その間、書庫の書棚の上で居眠りをしたり、薄暗い書庫のなかで雑談したのも、妙に印象に残る楽しい思い出であった。

親父の書架、蔵にあった本から始まり、友人、貸本屋の本、学校図書館の本、そしてわずかの自分の本などを乱読したわけであるが、よく利用した図書館があった、それは中学校から城趾を越えたところにあり、トンガリ帽子の塔のある西洋風建築のキリスト教公共図書館である。創立時（大正15年）から無料公開されており、キリスト教関係の図書が主で、宗教哲学、社会科学、自然科学等蔵書は数万冊もあった。私は考古学の本を読みに行き、閲覧室で2・3名の閲覧者と昼下りを読書して過すのが楽しみであった。

大学に入学して、寄宿舎生活を4年間過すことになったが、休暇で誰もいなくなった部屋で一人

本を読むとか、ほとんど人のいない図書館で過すとかがおおくなった。私のなかで薄暗い蔵、閑散とした図書館、うだるような暑さのなかで古本屋を漁ること、銭湯帰りに寄った貸本屋などが絵になり、風景になっている。

ところで、昨年海外に行き、フランス、イタリア、エジプト、イギリス、アメリカ、カナダ等の各国の本屋、大学図書館、公共図書館を見聞する機会を得ることができた。それらの図書館の多くの施設は非常に立派で近代的で、効率よく処理できるようにしており、目を見張らせられた。読書をする環境は万全といえる整った図書館が多くあった。しかし、ある目的のために本を読むという



こと、また知識のための読書することに配慮されすぎており、私のように閑散とした薄明りのなかで読書をしたことが多く、その次元のなかで読書して過すことがありすぎた者にとって身につまされる思いがする。私の読書についての楽しみは、砂漠のなかを一人歩くときの孤独の思いに似たもので、多くの閲覧者のなかで孤独を見出し、確認することではないようだ。

私の海外での旅の終り近く、トロント大学の近代的な高層ビルの図書館をエレベーターで案内してもらい、その機能的であるのに驚嘆し、その足で「ナイヤガラの滝」をバス見物に出かけた。カナダ側から滝を俯瞰していると、年とった日本人が一人近づいてくるのが見えた。その人はかつて中学校でともに、図書を「日本十進分類法」で整理したときの先生であった。36年ぶりに「ナイヤガラの滝」での出会いとなった。まさに本をきっかけの奇遇である。

先生が「よいのは滝だけだね」といって、アメリカ側に立去っていくのをながめながら、私の本との出会いはしつらえられた施設のなかではあまりなく、よい本に出くわすことは思いがけなく突然やってくるなあと思い、自分の心情に合致する図書館で読書をするおのれの姿を妄想するのであった。

(塾監局 庶務課長)

学術情報流通体制の整備と三田情報センターにおける資料組織上の問題

柳屋良博

(日吉情報センター副所長)



I

近年における学術研究の著しい発展は、研究成果を新たに公の流通の場に提供する学術研究資料の生産に、爆発的な増加を招いただけ

けでなく、それらの資料の所在や大綱を示す目録、書誌、索引、抄録などの二次情報の役割を高め、また、研究に利用される文書、数値、図形など研究資料・データの重要性をも増した。記録の媒体も図書・雑誌といった印刷物を越えてマイクロ資料、聴覚資料、磁気テープなどに及んでいる。諸科学の専門分化、ち密化の反面、個々の専門分野を超えた境界領域、複合領域など、既存の知識体系では接近できない分野の出現や研究の大型化が見られ、学術研究自体の内在的な状況変化が激しい。学術情報に対する研究者のニーズ、利用方法も複雑化、多様化して、必要な情報を効果的に選び出す困難さが、研究者に指摘されるに至った。欧米や国際的な学術情報処理システムでは、当該分野の多量の学術研究資料を網羅的に収集し、電子計算機による処理によって印刷物、磁気テープなどの二次情報を生産し、情報検索技術を用いて、主題別、研究グループ別のサブ・ファイルを編集し、選択的提供サービスやそれと検索サービスなど迅速、的確な流通、利用を図っている現状である。

このような情勢の下では、国際的観点に立って国際協力を配慮しながら、学術情報の生産・伝達・処理・蓄積・検索・提供という国内の流通体

制を国の施策として確立することが急務である。文部大臣の諮問機関である学術審議会に置かれた学術情報分科会の「学術情報の流通体制の改善について（報告）」（昭和48年7月）、文部省学術国際局の『我が国の学術』（昭和50年8月）は、こうした施策の表明である。すなわち、在来の形の情報流通体制（第1図書館システム）の抜本的改善を図り、情報の蓄積と流通の国レベルの拠点として、学問分野ごとの学術研究資料館の新設を検討するとともに、第1システムでは応じられない二次情報の高次利用を目的として、電子計算機、通信回線を中心とした情報検索を駆使する国レベルの中核機関（第2図書館システム）の確立を構想している。

わが国の大学では、教室・学科単位に必要な図書資料をまず蓄積し、次に個々の図書館に蓄積して利用するのが通例である。全国の図書館間のネットワークによって相互貸借、文献複写の行われるのは、最後の段階である。確かに、図書資料を身近な所に置いて利用できることは、研究者にとって望ましく、研究のための必要条件でさえあるかもしれない。しかし、学術情報量の増加に対する図書費の制約と収納スペースの物理的限界のある現実では、従来の対応だけでは、学術研究の障害とならざるをえない。国公立の総体としての大学図書館は情報の蓄積量としては、最大の所蔵拠点であり、第1図書館システムでの基盤的役割を果たす義務がある。激増する内外出版物を効率的に収集して利用を促進するには、個々の大学レベル、地域レベル、国レベルで、それぞれの計画的収集、大学のわくを越えた資料の分担収集、整

理の一元化を行い、相互にネットワークを組んで相互利用を図るなど、図書館間の相互協力体制を整備する必要がある。大学図書館改善協議会の審議（昭和51年3月）や日本学術会議の「人文社会科学系外国図書に関する大学共同利用図書館の設立について」（昭和49年11月）という勧告の志向するところも、現実の大学図書館の改善による学術情報の流通体制の整備であり、これによって、学術の研究成果を人類の知的共有財産とすることも可能となる。

慶應義塾大学研究・教育情報センターの発足は昭和45年4月であったが、これは、大学の情報提供機関の管理体制、機能の改善・改革を他大学に先駆けて着手したものであった。新図書館・研究室棟（三田）建設調査委員会の答申が塾長に提出された7年後の現在、書庫・閲覧・利用スペースの狭あいという発足当時からの施設上の懸案に、手がかりがつけられたわけである。三田情報センターには、専門課程の学部学生、大学院生、研究者という利用者数も利用形態も違う広範な利用者層を対象としながら、学習図書館、研究図書館、総合図書館、保存図書館という大学図書館の異質の機能を、同一施設の中で並置、共存させ、しかも、全学的な連絡、調整のもとに運営・管理せざるをえないという難題が横たわっている。建設の成案をうる過程で、議論が紛糾するにしても、トータルシステムとしての学術情報流通体制の整備の中で、その一翼としての大学図書館のネットワークの必要という時代の大勢に逆らってはなるまい。同一大学、しかも、同じキャンパス内に分散する資料群の一体化、一元的な資料の組織化、および、全学共通施設としての資料利用を図ることなくして時代の要請に答えることができないとは考えられない。西欧追従型の学術研究ではなく、学術情報の網的収集に立脚して、創造的な学術研究を振興するためには、情報利用の閉鎖性から脱却しなければならない。

II

図書館資料の組織化、すなわち、図書館資料そのものを利用者の要求を考慮しながら、利用しや

すい状態に整理し、資料の記録を作成し、その記入を配列して目録を編成すること、それによって蔵書の内容に関する情報を提供するという業務を担当してきた立場から、図書館資料の組織に関する具体的な問題に触れてみたい。所蔵資料の利用のしやすさ、必要とされる情報の提供は、資料組織化の成否にかかっているといつて過言ではなく、センターにおけるそのほかの業務に比べて、改善の遅れが目だつからである。

センターの発足とともに、研究室・図書館資料に対して、和洋それぞれの標準目録規則を採用し、全国目録作成機関である日・米の印刷カードの導入も図ってきた。しかし、個々の目録記入によって編成されるカード目録自体には、研究室・図書館間に差違がある。センター発足以前のもの踏襲したという制約にもよるが、検索ツールとしてのカード目録の全体的体系を有機的な統一体として整備する必要があり、現在、まだ作業途中である。（別掲「三田情報センター目録体系」参照）また、本来一つのものとして考えられるべき三田情報センター資料は、研究室と図書館の二つのコレクションに分割されており、しかも、研究室資料は27あまりの専攻・学科・学部の資料群に細分されたままである。

かつて、三田情報センター内部で、研究室・図書館の二つの大きなコレクションを、一つのコレクションとして再編成することの可能性が検討された。一応の結論は出されたが、それに基づく蔵書再編成・再分類計画は実施に至らなかった。それは、この作業が、数十万冊もの膨大な量の資料を対象としなければならないこと、さらに、標準的な図書分類法の採用に関して、教員利用者からの賛成を得られないのではあるまいかという危ぐの念があったからである。30年近くの間形成された既存コレクションの崩壊による研究上の障害、選書時の分類部門指定による資料検索の便宜、研究目的に従って図書を分類すべきだとする考えが研究者の中にはある。他方、図書館における図書分類法の原則は、当座の特異な利用目的ではなく、永続性を目的とするため、個々の図書の内容に忠実に従うことであり、食い違いがある。

採用される分類法、分類に対する考え方の違いについては、三田情報センターと利用者の間で、さらに協議される必要があるが、図書館サービスの原点に立ち返ってみれば、現在のままの状態では、所蔵資料の効率的、的確な利用は妨げられており、この計画の実施に向かって努力すべき余地があるように思われる。

目録体系の整備と分類統一という資料組織上の課題は、実は、一つの問題の表裏にすぎない。研究室・図書館のそれぞれのコレクションに対するカード目録が個別に編成されているため、両者を統合するものとして、合同目録がある。目録体系上の違いは、洋書書名目録の有無と資料内容の主題からの検索に答える分類目録の有無である。研究室の資料群全体に共通する分類法が採用されていれば、直ちに、研究室分類目録の編成が可能であり、さらに、研究室・図書館の分類法が同一でさえあれば、二つのコレクションを統合し、一体化する分類目録の誕生となる。つまり、分類統一問題が解決すれば、目録体系の整備も同時に決着がつくといえよう。

主題からの検索手段を欠いたままの「調整された分散方式」、すなわち、分散した資料の所在を著者名、および／もしくは、書名の目録によってのみは握できるだけに終わってよいものであろうか。すべての利用者の要求に答え、しかも、学問の体系と完全に一致する分類法など存在するわけもない。しかし、資料そのもの、あるいは、目録を検索する場合、図書内容の主題（あるいは形式）の類似性に基づいて、同一・同種のもものが集中し、関連主題が隣接し、理論的な順序に配列・体系だててあれば、資料の利用効率の高まるのは明らかである。専攻・学科・学部を越える特定の主題資料を求めて、書庫内各層を駆け巡る必要もない。地域研究など多様で複雑な研究テーマには、標準分類法では対応しきれないものもあり、独自の分類目録など、書誌上の対策も考慮しなければならぬ。それにしても、全学共通施設のコレクションを一つのものとして、集中化することを考えてはいけないのであろうか。所蔵資料の集中か分散は、賛否対立し、全学的協力体制を

崩壊させるものかもしれない。しかし、将来計画を検討中の今こそ、取りあげられるべきではあるまいか。情報センターに関与する者であるかぎり、結局、避けて通ることのできない根本問題なのである。

目録体系の整備としては、コレクションの分散を踏まえて、合同目録の充実が図られてきた。センター発足以前の研究室洋書・著者名目録や戦後一時期の図書館和漢書・著者名目録の合同目録への組み込み作業は完了し、現在、研究室和漢書・著者名目録の作業中であり、明治期から太平洋戦争中までの図書館和漢書・著者名目録についても準備段階にある。厳密には、目録欠除部分、書誌上の記載事項の精粗、カード配列の乱れもあるが、現存するカード目録の統合、廃止、転換およびカードの複製によって、検索ツール整備への多難な努力が続けられねばならない。

書誌情報の国際的な伝達手段として、国際標準書誌記述や国際逐次刊行物データシステムが制定され、国際的に標準化されたフォーマットにのっとりMARCを開発して自国の全国書誌を磁気テープに収め、国レベルのネットワークを組んで相互に交換・利用する Universal Bibliographic Control の実現を目指す活動が各国に見られる。目録規則の国際的な標準化を目的としながら、基本記入制の伝統を踏襲する英米系規則と、基本記入制を廃止して記述ユニット・カード方式となる日本目録規則・新版(草案)とは、大きな違いがある。センター発足後、基本記入一枚だけで編成してきた和漢書合同目録や、同一分類記号内の資料を一定の順序に個別化する図書記号法への影響は必至である。標目表最終案の公表されたNDC新版8版の適用問題もなおざりにはできない。資料組織の局面だけにかぎってみても、世界的動向を反映して、変革と流動の時代の渦中に置かれている。それだけに、本塾大学の研究・教育の発展に寄与すべき情報センターの職員としての責務を痛感せずにはおれないのである。

三田情報センター目録体系 <洋書閲覧用> 1977年9月現在

検索の手がかり	目録の名称	設置場所	備考
著者名からの検索	1. Catalogue of the Keiogijuku Library (classified) 1929年刊の巻末索引〔冊子体1冊〕	書庫棟3階、レファレンス・ルーム	ほぼ1927年まで、厳密には1925年までの受入図書を取録。2, 3に非取録分をも取録。
	2. 図書館著者名目録〔カード〕	図書館玄関ホール	1の一部を欠くが、現在まで。人名・件名(被伝者名, 被研究者名)でも検索可能。
	3. 合同目録〔カード〕	書庫棟3階	図書館蔵書については、2の備考に同じ。研究室蔵書については、創立以来現在まで。昭和45年3月までのロシア語と資料室分を欠く。
	4. ロシア語合同目録〔カード〕	書庫棟3階	図書館蔵書については、昭和45年3月まで、原則として著者名で、以降、著者名あるいは書名で検索のこと。研究室蔵書については、昭和45年3月まで、著者名、書名とも検索可能。以降、著者名あるいは書名で検索のこと。
書名からの検索			図書館蔵書には書名目録なし。ただし、著者のないもの、編さんもの、総合書名のある合集、逐次刊行物等は、1~4を書名で検索してみる必要がある。
	5. 研究室書名目録〔カード〕	書庫棟3階	創立以来現在まで。昭和45年3月までのロシア語と資料室分を欠く。
主題からの検索	6. Catalogue of the Keiogijuku Library (classified) 1929年刊〔冊子体1冊〕	書庫棟3階、レファレンス・ルーム	1に同じ。12門(旧分類)分類目録。
	7. 慶應義塾図書館分類目録 1977年刊〔冊子体4冊〕	書庫棟3階、レファレンス・ルーム	昭和36年12月までに整理済みのもの。12門(旧分類)分類目録で、6の一部を欠く。
	8. 図書館分類目録(NDC)〔カード〕	レファレンス・ルーム	昭和37年1月以来現在まで。日本十進分類法による分類。
			研究室蔵書には分類目録なし。

三田情報センター目録体系 <和漢書閲覧用>

検索の手がかり	目録の名称	設置場所	備考
著者名 からの検索	1. 図書館著者名目録(小型サイズ) 〔カード〕	レファレンス・ルーム	明治期から第2次世界大戦中まで。4に組み込み予定。
	2. 図書館著者名目録(標準サイズ) 〔カード〕	レファレンス・ルーム	第2次世界大戦後、現在まで。昭和45年3月までは4と同一。
	3. 研究室著者名目録〔カード〕	書庫棟3階	創立以来現在まで。昭和45年3月までの資料室分を欠く。4に組み込み予定。
	4. 合同目録〔カード〕	書庫棟3階	図書館蔵書については2の備考に同じであるが、昭和45年4月～52年3月整理のものは、著者名あるいは書名で検索のこと。研究室蔵書については、昭和45年4月以降のものであり、著者名あるいは書名で検索のこと。1, 3を組み込み予定。昭和52年4月以降、人名・件名(被伝者名, 被研究者名)でも検索可能。
書名 からの検索	5. 慶應義塾図書館和漢図書目録 明治45年刊の巻末索引〔冊子体目録1冊〕	レファレンス・ルーム	明治44年12月現在。10門分類目録
	6. 図書館書名目録〔カード〕	図書館玄関ホール	明治45年1月以来現在まで。
	7. 研究室書名目録〔カード〕	書庫棟3階	創立以来現在まで。昭和45年3月までの資料室分を欠く。
主題 からの検索	8. 慶應義塾図書館和漢図書目録 明治45年刊〔冊子体1冊〕	レファレンス・ルーム	5に同じ。
	9. 慶應義塾図書館和漢図書分類目録 昭和11～17年刊〔冊子体4冊〕	閲覧課, レファレンス・ルーム	第1巻: 昭和11年3月末現在 第2巻: 昭和12年3月末現在 第4巻: 昭和7年3月末現在 第5巻: 昭和13年3月末現在。
	10. 慶應義塾図書館分類目録 1977年刊〔冊子体8冊〕	書庫棟3階, レファレンス・ルーム	昭和36年12月までに整理済みのもの。12門(旧分類)分類目録で8を欠く。
	11. 図書館分類目録(NDC)〔カード〕	レファレンス・ルーム	昭和37年1月以来現在まで。日本十進分類法による分類。

備考 (洋書・和漢書共通)

1. 日吉情報センターの洋書および和漢書目録が、上記以外にレファレンス・ルームに設置されている。
2. 資料室, レファレンス・ルーム, 雑誌室には、上記以外に、それぞれのコレクションの閲覧用カード目録が設置されている。
3. 逐次刊行物(雑誌, 紀要, 研究報告, 新聞, 年鑑など)で現在継続して受け入れているものについては、コンピュータで打ち出した所蔵目録があり、それぞれのサービスポイントに設置されている。

図書館とコンピュータ

安西 郁夫

人類が生産する記録情報の量が激増するにともなって、多種多様な主題と言語をもつ学術出版物を受け入れる大学図書館には未整理図書滞貨という深刻な事態が進行している。ある学術書が5千部発行され、内3千部が世界各国の図書館で購入されたと仮定しよう。3千人の専門職が同じ書物をせせと分類し、目録を作成する——というのが従来のやり方であるが、この「古き良き時代」の方式を踏襲する限り、前述の深刻な事態から脱出できそうもないことは誰の目にも明らかであろう。一つの館が目録をとり、他の2,999館はその成果を頂戴すればよいではないか、とは誰しも考えることである。

アメリカでは1965年の高等教育法によるNPAC（収書・目録国家計画）がスタートし、LC（議会図書館）は全世界の学術出版物を網羅的に収集し、各国の中央図書館から目録データの提供を受け、LCの形式で目録を編成することになった。また同時にMARC（機械可読目録）計画が発足し、LCが整理した英語図書の目録を磁気テープに収録し、毎週1回発行することになった。収録対象言語は、現在では仏語・独語・スペイン語・ポルトガル語へと拡充されている。

MARCテープが頒布され始めた1969年以来各国の図書館界はテープの利用技術の開発につとめてきた。塾の研究・教育情報センターも早くからその開発に取り組んだわが国の数少ない機関の一つであるが、研究・教育・事務の三者が一つの電算機を共同利用している慶應では、最近のように利用が激増し輻輳し

てくると、長時間の特殊な処理を必要とするMARCテープを扱うことは極めて困難である。1台の電算機で総てを賄う時代は過ぎ去りつつある。利用が活発化すれば分散処理体制に移行せざるをえないであろう。

現在国立大学では理工系の研究機関が専用の電算機を持つことはあっても他の部局を持つことは稀であると一般に思いこまれがちであるが、事実はそうではない。図書館に専用の電算機を設置する国立大学が最近急増している。中央だけではなく、九州（鹿児島・長崎）四国（香川）北陸（福井）など全国各地に設置館が見られる。文部省は毎年2大学に図書館専用機を設置する予算を持っている。近年国立大学図書館の新築が相次いでいるが、専用機の設置を見込んで電算機室をあらかじめ設けることが一般化している。わが慶應においても、将来に備えるためというよりは現在の必要を満すためにも、図書館用電算機の導入を推進しなければなるまい。

今世界の図書館界が注目しているものにOCLCというネットワークがある。これは先述のMARCテープのデータを共同で利用するため、オハイオ州立大学にセンターを設け、州内の大学図書館に端末機を置いて結ぶ地域ネットワークとして出発したものであるが、その後参加希望館が全米各地に続出し、現在では端末機が900台を越えるほどの全米的な大ネットワークに成長をとげている。

わが国には残念ながらこの種のネットワークはまだ生れていないが、MARCデータをオンラインで利用できるわが国最初の端末機を慶應に近く設置することが計画されている。このパイロット・システムがわが国の学術図書館を結合するネットワーク形成の起爆剤となることを我々は念願しているのである。

（三田情報センター P・S部長）



年次統計要覧 <昭和51年度>

慶應義塾大学研究・教育情報センター

I. 図書費 <51年度実績及び52年度予算>

支部センター	51年度実績 <単位：円>			52年度予算 <単位：千円>		
	図書支出	図書資料費	(計)	図書支出	図書資料費	(計)
三田情報センター	88,553,061	91,880,172	180,433,233	104,342	110,957	215,299
図書館	87,053,061	785,504	87,838,565	104,342	1,284	105,626
研究室*	—	91,094,668	91,094,668	—	109,673	109,673
指定寄付金	1,500,000	—	1,500,000			
(私大研究設備相当額)	(13,600,000)		**			
日吉情報センター	12,432,445	25,934,860	38,367,305	15,216	32,273	47,489
図書館	12,432,445	1,124,920	13,557,365	15,216	1,253	16,469
研究室*	—	24,809,940	24,809,940	—	31,020	31,020
(私大研究設備相当額)	(4,500,000)		**			
医学情報センター	36,934,105	1,202,782	38,136,887	43,258	1,320	44,578
"	35,499,880	1,202,782	36,702,662			
指定寄付金	1,434,225	—	1,434,225			
理工学情報センター	26,417,418	681,137	27,098,555	35,236	750	35,986
"	25,561,923	681,137	26,243,060			
指定寄付金	855,495	—	855,495			
管理工学科寄託	(361,240)	—	**			
(私大研究設備相当額)	—	(1,000,000)	**			
合計	164,337,029	119,698,951	284,035,980	198,052	145,300	343,352

注) * 特別図書費は含まず

** () 内は合計欄には加算せず

私大研究設備相当額は私大研究設備助成金が51年度は打切られたため、義塾が臨時的に手当したもの

Ⅱ-1) 蔵書統計 <年間受入及び所蔵冊数>

支部センター	内 訳	単 行 本			製 本 雜 誌			合 計	
		和	洋	計	和	洋	計		
年 間 受 入 冊 数	三田情報センター	11,366	14,486	25,852	4,762	2,416	7,178	33,030	
	図 書 館	(5,422)	(6,450)	(11,872)	(2,159)	(698)	(2,857)	(14,729)	
	研 究 室	(5,944)	(8,036)	(13,980)	(2,603)	(1,718)	(4,321)	(18,301)	
	日吉情報センター	5,217	3,225	8,442	969	745	1,714	10,156	
	図 書 館	(3,633)	(399)	(4,032)	(779)	(18)	(797)	(4,829)	
	研 究 室	(1,584)	(2,826)	(4,410)	(190)	(727)	(917)	(5,327)	
	医学情報センター	559	241	800	689	1,732	2,421	3,221	
	理工学情報センター	472	446	918	2,742	4,999	7,741	8,659	
	合 計	17,614	18,398	36,012	9,162	9,892	19,054	55,066	
	所 蔵 冊 数 (累 計)	三田情報センター	398,638	312,899	711,537	89,100	91,619	180,719	892,256
		図 書 館	(308,621)	(195,788)	(504,409)	(52,612)	(34,713)	(87,325)	(591,734)
		研 究 室	(90,017)	(117,111)	(207,128)	(36,488)	(56,906)	(93,394)	(300,522)
日吉情報センター		111,293	60,627	171,920	10,709	14,985	25,694	197,614	
図 書 館		(74,894)	(6,302)	(81,196)	(6,578)	(117)	(6,695)	(87,891)	
研 究 室		(36,399)	(54,325)	(90,724)	(4,131)	(14,868)	(18,999)	(109,723)	
医学情報センター		15,027	18,154	33,181	31,380	58,844	90,224	123,405	
理工学情報センター		19,891	11,738	31,629	19,602	48,571	68,173	99,802	
合 計		544,849	403,418	948,267	150,791	214,019	364,810	1,313,077	

Ⅱ-2) 蔵書統計 <逐次刊行物：タイトル数>

支部センター	カレント			ノンカレント			カレント・ ノンカレント 合計
	和	洋	計	和	洋	計	
三田情報センター 図書館 研究室	3,683 (1,450) (2,233)	1,809 (524) (1,285)	5,492 (1,974) (3,518)	4,042 (3,177) (865)	1,754 (1,027) (727)	5,796 (4,204) (1,592)	11,288 (6,178) (5,110)
日吉情報センター 図書館 研究室	488 (371) (117)	417 (10) (407)	905 (381) (524)	174 (93) (81)	393 (3) (390)	567 (96) (471)	1,472 (477) (995)
医学情報センター	821	1,025	1,846	517	911	1,428	3,274
理工学情報センター	943	1,032	1,975	1,184	1,539	2,723	4,698
合計	5,935	4,283	10,218	5,917	4,597	10,514	20,732

Ⅲ-1) 利用統計 <貸出及び閲覧冊数>

支部センター	館外貸出			館内閲覧	前年度比 館外貸出(計)
	内 訳	教職員	学生		
三田情報センター 図書館 研究室	10,301 (6,720) (3,581)	51,423 (48,630) (2,793)	61,724 (55,350) (6,374)	64,239* 開架	1.01 1.01 0.95
日吉情報センター 図書館 研究室	3,102 (1,002) (2,100)	21,590 (21,590) —	24,692 (22,592) (2,100)	14,633 開架	1.27 1.29 1.10
医学情報センター	—	—	28,871	全開架	0.97
理工学情報センター	—	—	11,382	全開架	1.18

* 他に貴重書閲覧：1,072冊 / 112人

Ⅲ-2) 利用統計 <相互貸借(複写依頼を含む)>

支部センター	依頼を受けた(貸)		依頼した(借)		合計
	国内	国外	国内	国外	
三田情報センター	342	1	202	89	634
日吉情報センター	69	0	79	2	150
医学情報センター	13,257	115	2,143	109	15,624
理工学情報センター	19,116	0	957	116	20,189
合計	32,784	116	3,381	316	36,597

Ⅲ-3) 利用統計 <複写サービス>

内 訳 支部センター	学 内		学 外		(計)		M F
	件 数	枚 数	件 数	枚 数	件 数	枚 数	
三田情報センター *	26,920	585,560	281	6,821	27,201	592,381	31 件
日吉情報センター** (P P C)	—	51,827	7	74	—	51,901	0
医学情報センター	67,860	583,488	21,220	131,371	89,080	714,859	5,688コマ
理工学情報センター	20,567	356,918	19,082	184,769	39,649	541,687	0

* 他にリコピー 548件 / 85,466枚及びP P C 275,205枚

** コイン式P P Cのため件数は不明, その他, リコピー 164件 / 4,137枚

<研究・教育情報センター協議会委員>

昭和52年6月現在

情報センター所長	高 鳥 正 夫	商 学 部 教 授	福 島 義 久
文 学 部 長	三 雲 夏 生	医 学 部 教 授	牛 場 大 蔵
経 済 学 部 長	大 熊 一 郎	同 上	斎 藤 成 司
法 学 部 長	生 田 正 輝	工 学 部 教 授	宮 地 邦 夫
商 学 部 長	石 坂 巖	同 上	国 尾 武
医 学 部 長	嶋 井 和 世	文学部教授(大社)	横 山 寧 夫
工 学 部 長	藤 田 広 一	塾 監 局 長	鎌 田 義 郎
社会学研究科委員長	村 井 実	日吉情報センター所長	三 沢 進
文 学 部 教 授	森 岡 敬 一 郎	医学情報センター所長	保 崎 秀 夫
同 上	小 林 胖	理工学情報センター所長	有 賀 一 郎
経 済 学 部 教 授	中 村 勝 己	三田情報センター副所長	石 川 博 道
同 上	古 田 精 司	日吉情報センター副所長	柳 屋 良 博
法 学 部 教 授	内 山 正 熊	医学情報センター副所長	大 沢 充
同 上	田 中 実	理工学情報センター副所長	笠 野 滋
商 学 部 教 授	岩 田 曉 一	本部事務室長	安 西 郁 夫

編 集 後 記

今号では前回に引続き「私の研究とライブラリー」を特集テーマに選び、日吉と矢上から原稿を各一編ずつ掲載致しました。ライブラリーが研究活動にどうコミットできるのかという課題の探究に、更に真剣に取り組もうとする姿勢の現れとご理解頂ければ幸いです。また、これとの関連で新たに「現状分析レポート」というテーマを設けました。これは義塾の情報センターが利用者である教職員及び学生のデマンドに対応しようとする現状の姿を紹介するものです。ご意見・ご要望等をお待ち致します。(中島記)

編 集 委 員

渋 川 雅 俊 (情報センター本部)
 中 島 紘 一 (同 上)
 鈴 木 富 弥 夫 (三田情報センター)
 関 洋 (日吉情報センター)
 佐 藤 和 貴 (医学情報センター)
 小 川 治 之 (理工学情報センター)